

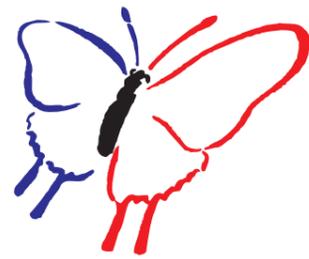


INFOS

日仏整形外科学会広報誌 **アソフオ**

■名誉会長……………七川 敬次 ■会長……………小林 晶 ■副会長……………瀬本喜啓
Président d'honneur — K. SHICHIKAWA Président — A. KOBAYASHI Vice-Président — Y. SEMOTO
■書記長……………大橋弘嗣 ■書記・会計……………青木 清 藤原憲太
Secrétaire général — H. OHASHI Secrétaire et Trésorier — K. AOKI K. FUJIWARA
■幹事……………金子和夫 安永裕司 久保俊一 ■名誉会員……………小野村敏信 坂巻豊教
Membre exécutif — K. KANEKO Y. YASUNAGA T. KUBO Membre d'honneur — T. ONOMURA T. SAKAMAKI

■事務局：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院内（係：大橋弘嗣）
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339
Bureau : Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON
■発行所：〒 530-0012 大阪市北区芝田 2 - 10 - 39 大阪府済生会中津病院（編集者：大橋弘嗣）
Tel. (06) 6372-0333 Fax. (06) 6372-0339
Maison d'édition: Saiseikai Nakatsu Hospital, Shibata, Kita-ku, Osaka 530-0012 JAPON (Éditeur : H. OHASHI)
■ホームページアドレス：http://www.sofjo.gr.jp



2014年を迎えて

小林 晶

SOFJO会員の皆様、明けましておめでとうございます。お元気で新しい希望に燃えて、2014年を迎えられたことと推察しております。今年も宜しく願いいたします。

昨年(2013年)も本学会は画期的な事項を重ねることができました。先ず、第12回AFJOが5月31日から2日間に亘って、飯田寛和関西医大教授、田中千晶京都市立病院部長の主宰で京都において開催されたことです。ご承知のように第1回AFJOは1990年パリで最初に行われましたが、以前にも増して盛大になり、今回はフランス側37名(医師23名、夫人14名)、日本側150名(医師127名、夫人23名)合計187名の多きを数えました。これはかつて無かったことで、両会長のご努力と「おもてなし」の心の賜物であったと思っております。参加したフランス側は感激を新たにして帰国しておりました。私は会員一同を代表して両会長並びに準備に参加された方々に深甚の謝辞を捧げる次第です。

次には懸案であった「仏日・日仏整形外科学用語集」が3年懸りの作業の末、5月に発行できたことが画期的なことでした。故森崎直木先生(東京女子医大名誉教授)がお一人でこつこつと用語を集められ、整形外科単独の仏日用語集を出版されたのは、1989年のことでした。2年後に改訂第2版が出版されて以後絶版となっていたのを惜しみ、これを基礎にしてリニューアルし、更に



日仏の分を追加して、出版に漕ぎ着けました。この出版は我々SOFJOの義務でもありましたので、できあがった用語集が陽の眼を見たときの喜びは尽きないものがありました。英語、独語の用語集は沢山ありますが、整形外科単独の辞書は私の知る限りでは存在しません。個性豊かな仏整形外科学を学ぶ上で、最高の寄与ができた、密かに自負しているところです。長期間、作成・編集作業を担当してくださった役員の方々に厚くお礼を申し上げます。会員以外の方々にもお褒め戴ければ幸いです。

第3の事項としては、2011年田中千晶京都市立病院部長、2012年順天堂大学金子和夫教授、2013年には大橋弘嗣大阪府済生会中津病院部長と毎年続けてSOFJCOTの名誉会員に選ばれたことです。欧米の会員ならともかく、遠く東洋の日本からこのような栄誉を受けられたことに、大きな喜びを感じます。これは三人の先生が多年に亘り、日仏交流に尽くされた功績に贈られたものです。今後益々お元気でSOFJO、SOFJCOTの親善交流に活躍して戴くようお願いいたします。

交換研修制度はその後発展の一途を辿り、我が国からの交換研修医は70名を越え、この制度が知れ亘るにつれ、ここ数年は毎年10名を越す応募者があり、選考する側は嬉しい悲鳴をあげております。毎年のSOFJOでの帰朝講演でお聞きになる通り、学問や文化面で多くの実りを得て、闊歩しておられる姿は、将来を見据えた理想的な制度ではないかと思っております。多忙な中に交換研修医の受け入れと、与えられました両国施設の厚遇に厚くお礼を申し上げる次第です。

反面、活発な若い会員が増加した我々の学会は、フランス側からの交換研修医に来日を勧めなくてはなりません。研修という大きな使命の中には、新しい日本の整形外科学だけでなく、優れた我が国の文化に触れてもらうことも重要なことではないかと思えます。古くはジャポニズムを例にとるまでもなく、両国の間には合い通じる感性が存在すると私は思っています。是

非、この点にも留意されて、フランスに我々の「もてなし」を育ててもらふ努力をお願いするのも、この制度の大きな目的に違いありません。

この制度を末永く持続するためには、資金面の裏付けが必要なことは言うまでもありません。執行部としても努力いたしますが、皆様の御協力をお願いしておく次第です。

最近是我が国からSOFJCOTに参加する会員が増加して交流を深め、斬新な土産話を持参してくれます。私が1960年代に最初に留学した頃に比べると、今昔の感があります。あの頃は七川欽次先生、菅野卓郎先生と私が参加したくらいで、我が国に対する相手の認識も大きく無い時代でした。それだけ、国際性が身につい

た若さ溢れる会員の方々の積極性が、フランス側の関心を高めているのにほかなりません。これはまさにélan vitalのなせる業で、会員の皆様に感謝しております。

今年(2014年)は9月6日に第16回SOFJOが福岡市で塩田悦仁教授(福岡大学医学部リハビリテーション部)の主宰のもと開催されます。福岡市は人口が150万人を突破し、アジアとの窓口として、多くの国際学会も開催されて、海山とも近く観光の施設も多彩をきわめています。多くの会員が参加され盛り上げて戴くよう希望しております。

今年の会員の皆様のご多幸を祈念しております。Vive la SOFJO!



第12回 AFJOを主催して

京都市立病院整形外科部長 田中千晶

2013年5月31日と6月1日に第12回日仏整形外科合同会議(AFJO)を京都大学の芝蘭会館において関西医科大学整形外科教授の飯田寛和先生と共同開催致しました(写真1上段)。日仏整形外科学会会長の小林晶先生をはじめ、多くの会員の先生方のご協力ご支援を戴き、盛会となりました。テーマは“From the New Points of View”として、3題の特別講演と75題の一般演題と37題のポスター演題に加え、4題のランチョンセミナーを採択致しました。同伴者を含めてフランスから35名と日本側から148名の参加があり、股関節・膝関節・脊椎・手の外科・足の外科・外傷など広い分野に渡り、実質的な討議がなされました。特別講演では私の留学時代からの友人である股関節のLuc Kerboull先生(写真1下段左)にFemoral Impaction Grafting using the Charnley-Kerboull Cemented Stemを、脊椎のPierre Roussouly先生(写真1下段右)にRole of Pelvis Tilt Orientationを、膝のPhilippe Neyret先生(写真2上段左)にContribution of Lyon School in Patello-femoral Disorders Managementを講演して頂きました。これらの講演は1世代では成し得ない、2世代・3世代の継続した臨床研究の成果であり、フランス整形外科

が世界に誇る内容です。参加者の先生方からも非常に高い評価を頂きました。また4題のランチョンセミナーをOlivier Guyen先生、松田秀一先生、Luc Kerboull先生、松下睦先生にお願いしました。いずれの講演も注目の話題を提供した素晴らしい内容でした。各分野で質疑や討論も非常に活発で、学術的に充実した有意義な学会になったことを喜ばしく思います(写真2上段右・下段)。2年後にはPhilippe Hernigou先生によってフランスで第13回AFJOが開催される予定となり、再会を期して盛会の内に閉会となりました。

学会前日に京都岡崎の細見美術館にて歓迎行事とWelcome Cocktail Partyを行いました。細見美術館が誇る日本美術の名品の鑑賞、茶室で茶道体験の後に細見良行館長による文化講演を同時通訳付きで聞いていただきました。琳派の歴史とフランスに及ぼした影響について美しいスライドを交えた講演は日仏双方の会員の関心を集めました(写真3上段)。Cocktail Partyでは来賓のフランス総領事のPhilippe Janvier-Kamiyama氏と門川大作京都市長から挨拶を戴き、日仏の文化交流が紹介されました。小野村敏信大阪医大名誉教授の乾杯の発声に続き、大変和やかな文化交流の場となり

ました(写真3下段)。

学会初日終了後に清水寺の特別拝観を行いました。天候にも恵まれて素晴らしい夕暮れを見ることもでき、講堂で茂山一門による狂言「棒縛り」も全員で鑑賞しました。英語での解説付きでユーモラスな解り易い日本のcomedyを十分に楽しんでいただきました。Banquetは清水寺成就院で行いました。月の庭園と呼ばれる名園を英語での解説付きで鑑賞した後

ランスワインを堪能して頂きました。京都の歴史と文化を背景にフランスの趣向を取り入れたBanquetは大変盛り上がり、参加者の皆さんに喜んでいただきました(写真4・5・6)。

最後に今回のAFJOを支えてくださった企業各社、日仏整形外科学会会員および大西真興清水寺執事長、徳力道隆氏等多数の関係の方々に深謝申し上げます。



●写真1



●写真2



●写真3



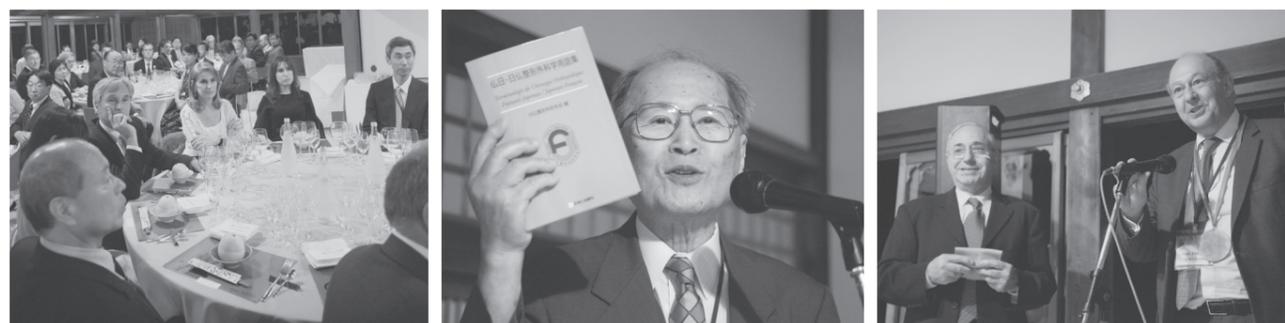
●写真4



●写真5



●写真6





May 31th

| | INAMORI Hall | YAMAUCHI Hall | Annex 2F Conference Room 1 | Annex BF1 |
|-------|--|--|--|-----------|
| 8:30 | 8:30 Opening Remarks | | | |
| 8:40 | | | | |
| 9:00 | Hip 1 Primary THA | | | |
| 9:30 | | | | |
| 10:00 | Coffee Break 1 at Lobby | | | |
| 10:10 | Hip 2 Revision THA | | | |
| 10:30 | | | | |
| 11:00 | 11:05 Special Lecture 1 Dr. Luc Kerboull | | | |
| 11:30 | | | | |
| 12:00 | | 12:00 Luncheon Seminar 1 Pr. Olivier Guyen | 12:00 Luncheon Seminar 2 Pr. Shuichi Matsuda | |
| 12:30 | | | | |
| 13:00 | 13:00 | | | 13:00 |
| 13:30 | Poster Discussion at Lobby | | Business Meeting | |
| 14:00 | 14:00 Special Lecture 2 Dr. Pierre Roussouly | | | |
| 14:30 | | | | |
| 15:00 | 14:50 Spine 1 | | | |
| 15:30 | 15:30 Spine 2 | 15:30 Hip 3 | | |
| 16:00 | | | | |
| 16:30 | 16:25 Spine 3 | 16:25 Hip 4 Dual Mobility | | |
| 17:00 | 17:00 Foot | | | |
| 17:25 | | | | |

June 1st

| | INAMORI Hall | YAMAUCHI Hall | Annex 2F Conference Room 1 | Annex BF1 |
|-------|---|---|---|-----------|
| 8:30 | 8:30 Hand and Elbow | 8:30 Hip 5 Direct Anterior Approach | | |
| 9:00 | | 9:05 Hip 6 Difficult Issues in THA | | |
| 9:05 | Knee 1 TKA | 9:40 Shoulder | | |
| 9:30 | | | | |
| 10:00 | Coffee Break at Lobby | | | |
| 10:20 | 10:20 Special Lecture 3 Pr. Philippe Neyret | | | |
| 11:00 | | | | |
| 11:05 | Knee 2 | 11:05 Hip 7 | | |
| 11:30 | | | | |
| 12:00 | | | | |
| 12:15 | | 12:15 Luncheon Seminar 3 Dr. Luc Kerboull | 12:15 Luncheon Seminar 4 Dr. Mutsumi Matsushita | |
| 12:30 | | | | |
| 13:00 | | | | |
| 13:25 | | 13:20 Closing Remarks | | |

留学報告

東名厚木病院整形外科
成尾宗浩先生

平成24年4月からの約1年間、日仏整形外科学会クリニカルフェローとしてリヨンにて研修を行って参りましたので報告致します。

はじめに

留学するまでの私は、フランスとは全くといっていいほど縁のない生活を送っておりました。ワインといえば居酒屋の渋い赤ワイン、チーズといえばギザギザに切れているプロセスチーズ、クロワッサンがフランスのパンで、しかもフランス語であることさえ知りませんでした。旅行でも行ったことがなく、知っているフランス語はかろうじてMerciとBonjourだけ、他のフランス語など想像したことさえありませんでした。

しかし、同期の活躍には刺激されるもので、2011年に同じく留学された斎藤朝海先生から本学会の存在を教えていただき、さっそく交換留学に応募させていただいたことが事実上わたしとフランスとの最初の接点でした。

まだ採用されてもいないのに、どうせ行くな外国での生活を通して自らの幅を広げたい、なるべく大量かつ多様な症例に触れたいと考え、3ヶ月以上の留学を希望しました。面接の際、思いのたけをお話したときの諸先生方のややひきつった顔が意味するところを、当時の私はまだ知る由もありませんでしたが、間もなくしてビザ取得という問題にぶち当たりました。ほとんど何も解決しないまま時間が過ぎ去りとりあえず渡仏という形での幕開けとなりました。

留学は前期と後期に分け、それぞれ肩、膝のフェローとして別々の専門施設で研修を行うプログラムを組みました。書記をされている藤原憲太先生より肩としてリヨンのGilles Walch先生を、順天堂大学金子和夫教授より膝として同じくリヨンのPhilippe Neyret教授をご紹介いただきました。

また現地での交流が増えるにつれ、北はルーアン、南はニース、東はストラスブール、西はトゥールーズ、ボルドーに訪問する機会を得ました。

Centre Orthopédique Santy

さまざまな事情によりビザがとれないまま、ひとまず丸腰でリヨンに到着したのが4月中旬、しかし冬のよさ寒さに驚き、効かない暖房を備えたスタジオで家族ともども凍えてのフランス生活が始まりました。

リヨンはローヌ川・ソーヌ川という2つの川に挟まれた美しい地域で、ブルゴーニュワインの産地に近く、美食の都としても知られています。国際刑事警察機構 (Interpol) の本部があり、またTGVが最初に開通した街のひとつでもあります。

前期はリヨ市内8区の医療地区にある当院にて約3ヶ月、Gilles Walch先生のもとで肩関節フェローをさせていただきました。Walch先生はフランス整形外科のみならず世界のshoulder surgeonのボスの存在で、膝関節にも造詣が深くtrochlear dysplasiaとpatellar dislocationの関係を初めて明らかにしたことで世界的に有名です。そんな大御所にもかかわらず、右も左もわからぬ小僧

が拙いフランス語でどもりながら挨拶している様子を好意的に受け止めてくださったことに大変感激し、つくづく最初の研修がこちらでよかったと感じた次第です。この施設は他にも脊椎、股関節、膝、リウマチ、スポーツ専門医が集うフランス屈指のプライベートクリニックです。

Walch先生の手術は火曜、水曜の週2回、外来は月曜、木曜の週2回でした。

手術は関連の別施設で行われ、朝6:30から当日の症例のディスカッションを行い、7:30から執刀開始となります。術者が直に雇った選任看護師がドレープから閉創まで手術以外のあらゆる準備をこなします。二つの部屋のうち片方では麻酔、ドレーピングがすでに完了した状態で待機しており、術者はひたすら往復

して効率よく手術ができるよう工夫されていました。症例は、反復性肩関節脱臼に対する肩関節制動術(open Latarjet)、鏡視下腱板修復術、変形性肩関節症に対するTotal shoulder arthroplasty(TSA), cuff tear arthropathyに対するreverse shoulder arthroplasty(RSA)およびrevisionなどが主で、平均して4~5件を1時頃までに完了します。助手として術野に入り、直接丁寧な御指導を頂いたことは大変光栄で貴重な経験となりました。印象的であったのは、各症例に対してほとんどアプローチを変えないことでした。revision例においても基本的な手順はほとんど変わらず、“型”からブレずに進めて行くことの重要性を改めて教わりました。

近々わが国においても導入が検討されているRSAは、凹凸の関係を逆にもってこることで骨頭の回転中心を引き下げ、腱板のqualityによらず三角筋の力で挙上を実現する人工関節です。早期から良好な機能が獲得される反面、困難なrevisionと表裏一体のため適応は慎重に検討されます。Walch先生はその第一人者でありフランス国内はおろか世界中から見学者が集まります。revision症例の依頼も多く、ある日はポルトガルの先生がフランスまで患者をつれて手術に参加しておりました。フランスではRSAを基軸として治療が組み立てられていますが、RSAの功罪も徹底的に吟味され次世



●写真1 Walch先生(右端)とフェロー達



●写真2 手術介助中



●写真3 RSA revisionの術前写真。厳しい症例も沢山紹介されてきます。

代のインプラントも開発中です。厳しいrevisionを目の当たりにすると、日本においてはそれに抗する手段がない状態で爆発的に普及するであろうことに一抹の不安を感じたことも事実です。

期間中は、同時に来られていた名古屋のはちや整形外科の村粉孝一先生と、仙台赤十字病院の小池洋一先生と一緒に研修することができました。朝の手術症例カンファレンスでは他にドイツ、オーストラリア、スペインからのフェローたちと一緒に参加し、Walch先生から直々に一人一人意見を求められました。日本では常識と考えていたことが根底から覆されることもしばしばあり、とくに反復性脱臼に対する関節鏡手術は



写真4 Nice shoulder courseにて、Centre Orthopédique Santyにて同時期に研修していた仙台赤十字病院の小池洋一先生(前列左)、フェローのJuan, Patric, Chris, Dr LaffosseのフェローAustinと。



写真5 Walch邸にてフェローのPatricとはちや整形外科の村粉孝一先生、Walch先生の奥様と。こちらで頂いたワインがおいしくて忘れられません。

10年以降の再脱臼率が上昇するため“unreliable”であり、リヨンでは60歳以上の活動性の低い症例にしかもはや行われていないとのことで大変驚き、コンセプトの違いを知る貴重な場でした。また日本の先生方と研修期間中に繰り返しディスカッションできたことは大変有意義で勉強になり、加えて日本国内での人脈が広がったことは想定外の大きな収穫となりました。

■ HÔPITAL de la CROIX-ROUSSE

9月からはリヨン第一大学付属病院のPhilippe Neyret教授のもとで膝関節フェローとして研修を行いました。この施設はElmslie-Trillat法で知られるAlbert Trillat教授やtrochleoplastyのHenri Dejour教授といった大御所を輩出しているフランス膝関節外科のメッカで、リヨン膝グループの中核です。

Neyret教授はその直系にあたり、現在ALRM (Association Lyonnaise de Restauration Motrice)のヘッドとして、また2015~17年ISAKOSの次期presidentにも就任される予定です。

フェローとしては私以外にもイタリア、オーストラリア、ブラジル、ベネズエラ、アルゼンチン、トルコ、コソボ、アルジェリア、サウジアラビアから来ていました。

Neyret教授の手術はほとんどがtibia first cut, posterior reference法によるmobile PSタイプのTKA、UKA、骨切り(closing wedge)、ACL再建でした。骨切りのパリエーションは豊富で、前方不安定性の原因を脛骨後傾の不足と診断した症例には、脛骨粗面を翻転して前後方向に斜め骨切りし、脛骨後傾を作成して骨性に制動する手技を行っていました。また骨形態異常が重度の反復性膝蓋骨脱臼症例には、大腿骨遠位内反骨切り術+脛骨粗面移行術+trochleoplasty+MPFL再建術という極めてレアな術式を行っていました。

ALRM主催の学会では、反復性膝蓋骨脱臼にどのような基準で骨切りとMPFL再建を“組み合わせるか”がテーマでしたが、先日日本で参加した学会では、どちらを“選択するか”がテーマでした。この分野でも差異が見られ非常に興味深いです。

リヨンのACLRはBTB再建が基本です。大腿骨孔はアウトサイドインで作成し、骨片の形状を台形に形成して同じくアウトサイドインで挿入、大腿骨側はプレスフィ

ット、脛骨側は吸収性のインターフェレンシャルスクリューで固定します。不安定性の強い症例、revision症例には大腿骨側の骨片に作成した骨孔に薄筋腱を通し、antero-lateral ligament再建を意図したextra-articular augmented ACLRを行っており大変興味深い術式でした。若手の先生方もかなり難易度の高い手術を任されており、器用に手術を行っていて感銘を受けました。

当初よりNeyret教授にはscientific studyに関わることを勧めていただいていたので、これはよい機会と考え参加してみました。しかし、ある程度覚悟はしていたものの、その作業は困難を極めました。まずscientific meetingでお題を決めるのに2カ月、対象

症例のリストを得るまでに1ヶ月、実際に画像フィルムを取り寄せるのに4ヶ月かかり、実際に作業にとりかかることができたのはじつに帰国まで1ヶ月を切っただけでした。フランスのお役所仕事はかなり時間を要しましたが、大学においても同じであり日本との違いをここでも痛感することになりました。病棟の小部屋に籠もり(ほぼ占拠)作業を開始したはよいものの、看護師さんや秘書さんに聞かなければならないことは必ずでてきます。しかし、英語が通じる方はパートタイムの秘書さん一人。看護師さんにははじめから“No English”と断られ、即座に八方塞がりに陥りました。しかたがないので2歳児レベルのフランス語でやりと

りし、帰国前日ギリギリまで作業を続けているうちに、“お前は毎日夜遅くまで仕事をしているな”とスタッフからも言われるようになり、いわゆる日本人のイメージを地で行ってしまいました。ツッコミを入れたくてもフランス語で言えないフラストレーションを労力に転換し、栄養科のポタージュスープを勝手に飲みながら栄養を補給し、ねぎらいにやってくる看護師さんに癒されつつも疲労がピークに達した頃、ついに帰国となりました。

極めて悪い作業効率でやれるだけやって帰ってきた次第ですが、いろいろな面で深く関わられたことは大変貴重な経験となりました。

その他の施設

6月にニースで行われたNice shoulder courseに参加した際、仙台赤十字病院の小池洋一先生がPascal Boileau教授のもとで研修されていたこともあり、Walch先生の紹介で私も手術および外来の見学をさせていただきました。

まず初めに、奥の方で着替えていた方が女性であることに度肝を抜かれ、更衣室が男女一緒であることを初めて知りました。LHBテノデシス、bony Bankartに対する鏡視下手術をみることはできましたが、船橋整形外科の菅谷先生の方法を踏襲されていたのが印象的でした。

過去に、台湾の台中にあるフランス資本のキャダバートレーニングセンターAITSを訪れた際、Pierre



写真6 Neyret教授(左から2番目)邸にて。25年前Pierre Chambat先生のところへ留学されていた広島大学OBの岡田先生(右から2番目)、Caton-Deschamps patellar height ratioで知られるDeschamps先生(右端)も一緒に写りました。



写真8 骨切りにより前方不安定性の制動を試みた手術。骨切り症例は豊富です。



写真10 Hôpital de la Croix-Rousseのフェロー、JamesとRicardo(前列)、レジデントのHerveとOlivier(後列)。このあと終バスを逃して送ってもらうハメに。



写真7 Neyret教授の手術見学、多い時はビジターで溢れ返ります。



写真9 新年早々のカンファレンス風景。ケーキの中に入っている当たりを引いたので王冠をかぶらされます。このあと、この姿のままNeyret教授に質疑応答を求められるに至ります。



写真11 Hôpital de la Croix-RousseとCentre Orthopédique SantyがフランスにおけるFIFA公認medical centerに共同指定されました。FIFAのchief medical directorとスウェーデンのチームドクター達を招いてのclosed meetingに参加することができました。



写真12,13 ボルドーのClinique Saint Antoine de Padoueの肩外科医Pierre Henri-Flurin先生とご子息と(写真上)、および膝・足外科医Christophe Delavigne先生(写真下)と。肩は1400件/年/人、膝は2500件/年/4人と伺い驚愕しました。お忙しいなかでのhospitalityに感激です。

Henri Flurin先生と懇意にさせていただいたことがきっかけで、本留学中にボルドーのClinique Saint Antoine de Padoueを訪ね、肩関節鏡手術を見学させていただきました。その後は高校生になる息子さんといっしょに食事に連れて行って頂き本当に嬉しいひとときでした。また同施設の膝・足関節外科医であるChristophe Delavigne先生もご紹介いただきました。ACL再建術に手洗いし、実際に移植腱の採取や形成を任せてもらえたうえにtipsまで教わり、そのhospitalityには大変感激しました。大阪厚生年金病院の米田稔先生にはトゥールーズにあるClinique de l'unionのJean Kany先生をご紹介いただきました。鏡視下支援での広背筋腱移行術に入れていただき、その手慣れた手技には驚愕しました。外からはおそらく見えないようなコツをご指導いただき非常に勉強になりました。東京医科歯科大学の二村昭元先生がUniversité de Rouenにいらした時には私もルーアンに立寄り Fabrice DUPARC教授の解剖学教室を見学させていただきました。久々の解剖で少々面食らいましたが地道な研究をみずからされている姿が印象的でした。リヨンからは車での移動でしたが、途中雪に降られ立ち往生しました。スタットレスタイヤを装備している車は極めて珍しいとのことで、横転している車を横目にみながらノーマルタイヤで運転しつづけました。幸い晴れにかわり事なきを得ましたが滞在中でもっとも恐ろしい経験でした。



写真14 米田稔先生にご紹介いただいたトゥールーズClinique de l'unionのJean Kany先生と昼からワインとステーキ。鏡視下支援の広背筋移行術を見せていただきました。

順天堂大学の内藤聖人先生にはストラスブール大学で手の外科留学中であった東京大学の宮本英明先生



写真15,16 ルーアン大学解剖学教室で東京医科歯科大学の二村昭元先生、Fabrice教授と。



写真17 ストラスブール大学内にあるIRCADのトレーニング施設にてPhilippe Liverneaux教授と。常にハイテンションでした。

生をご紹介いただき、Philippe Liverneaux教授にお会いすることができました。白熱したカンファレンスの最中に私を見つめ、手の外科医でないのなら出て行け、といきなり先制パンチに恐れ戦きましたが、教授流の冗談であると理解するにはいささか時間がかかりました。あいにく教授の手術は見学できませんでしたが、臨時外来の開催やロボット手術のデモをさせて下さったりと、とても親切にさせていただきました。

■ フランスでの生活

前半はリヨン郊外のSaint Foy Les Lyonという閑静な住宅街にスタジオを借りました。バスで最寄りの地下鉄perrache駅まで約20分ですが、座席の取り合いはなかなか激しいものがあります。ベビーカーと1歳の子連れであっても譲ってはもらえません。渡仏後まもなくして茨城西南医療センター病院の渡辺新先生、京都府立大学の斎藤正純先生とお会いし情報交換できたことは大変心強く有り難い存在でした。

現地の方たちとの出会いもありました。ちょうど同じ歳くらいの家族と仲良くなり、家族ぐるみの付き合いが始まりました。とても頼りになり、フランスでの生活がより一層深いものになりました。

フランスは食事がおいしいと聞いていましたが、主食が米でない生活に限界を感じ、ほとんど家で妻の作



写真18 茨城西南医療センター病院の渡辺新先生(中央)、京都府立大学の斎藤正純先生(右端)と。間違えて入ったチュニジア料理店でのワンショット。援軍来たの気分です。

る食事をとっていました。日本からもってきた炊飯器で炊いたごはん味噌汁を基本にしていたのですが、ワインは安いものでも十分おいしく、毎日のように買って来てはチーズとハムで晩酌できたことはこの上ない幸せでした。バスと電車を利用しての毎日の買い物は決してラクではありませんでしたが、市場で手頃な品を物色するのは悪くありません。秋から冬にかけてはザクロが並びます。ドリンクでしか味わったことがないためここぞとばかりに買い込み毎日のように食しま



写真19 友人宅にて。本当によくしてもらいました。



写真20 はちや整形外科の村粉孝一先生(左端)と東京医科歯科大学の二村昭元先生(中央)と。研修先は違えど寒い冬に同じ地域で研修できたことは本当に心強かったです。

した。日本では高級フルーツ店でないとなかなか手に入りませんが、市場では箱で買っても6ユーロのときもありました。

10月からはTGVの主な発着駅Part-Dieu駅に近いCharpennesのマンションに引っ越しました。家から近いところにリヨン大学があり、ちょうど学籍登録したこともあって学生に混じって学食を食べ、図書館に出入りしたりと、ちょっとした大学生の気分を味わってみました。図書館には日本のマンガや映画が大量にあり、改めて日本文化の人気の高さに気付かされます。

日仏整形外科や所属病院から来られたフェローの先生方と家で食事する機会も増え、船橋整形外科の河合信昭先生ご夫妻、大学の同級生である日本医科大学の石原陽子先生、はちや整形外科の村粉孝一先生、東京医科歯科大学の二村昭元先生らとフランスで同じ時間を過ごせたことはとてもよい思い出になりました。



写真21 Walch先生のとこに留学中の船橋整形外科の河合伸昭先生ご夫妻(右)、マルセイユ留学を経て帰国直前の日本医科大学の石原陽子先生(中央)と自宅にて。同世代とフランスで会合でき、とても刺激的でした。

アヌシーのDr Laffosseによる肩関節セミナーに出席した際には、大阪厚生年金病院の米田稔先生、市立豊中病院の水野直子先生ともご一緒し、勉強しながらも楽しい夜を過ごすことができました。

1日の研修が終わった後は、お気に入りのParc de la tete D'orに行って動物を見たりカフェで一服したり、世界遺産の街中をブラブラしてショップを覗いたり、暇を持て余すことは片時ありませんでした。リヨンは周辺の観光地へのアクセスがよいため、休日にはシャモニーやアヌシーで美しい自然に触れたり、プロヴァンスやマルセイユまで足を伸ばしました。



写真22 TORNIER shoulder courseにて。Hôpital de la Croix-RousseのフェローJames(左から2番目)、市立豊中病院の水野直子先生(右から2番目)と。

■ おわりに

渡仏前は滞在できるかどうかはわからず不安で一杯でしたが、振り返ってみれば多くの人に支えられながらひたすら走り続けた1年間でした。厳しいこともたくさんありましたが、家事育児を一手に引き受けてくれている妻や激励してくれる家族・親族、リヨンの人々のやさしさに助けられ、世界中のフェロー達や現地の方々ともたくさん友人になることができ、何にも替え難い経験をさせていただきました。単に手術法を学ぶだけであれば、書籍やビデオで勉強するほうが効率的かもしれません。しかし、留学の意義は、慣れ親しんだ生活圏から抜けて苦勞して経験したことのすべてであると確信しています。この経験がいずれ必ずや己の

視野を広げ、自らを成長させると信じ今後の仕事に還元していく所存です。

末筆になりましたが、本留学の機会を与えていただきました会長の小林晶先生、研修先をご紹介いただきました藤原憲太先生、詳細な情報を教えてくださいました順天堂大学の金子和夫主任教授、久保田光昭先生、市立豊中病院の水野直子先生、慶応大学の松村昇先生、多忙な最中に本留学を許可して下さいました東京女子医科大学の加藤義治主任教授、村田泰章准教授、齊藤力先生、はるばる現地まで激励に来て下さいました東名厚木病院 杉山茂樹院長ご夫妻、一切の家事育児を引き受けサポートしてくれた妻、その他多くの方のお力添えを頂き今の私が成り立っていることを痛感しております。この紙面をお借りして篤く御礼申し上げます。



写真23 リヨンの夕暮れ。本当に綺麗な街です。

日仏交換研修帰朝報告

仙台赤十字病院整形外科
野口 森 幸 先生

はじめに

2013年5月末から2ヵ月間日仏整形外科学会の交換研修生として、リヨンのLYON ORTHOCLINIC、パリのCMC Paris VとMaussin-Nollet clinicの3つのprivate clinicを訪問させていただきました。いずれもフランスを代表する新進気鋭のhip arthroscopyを得意とするhip surgerで2012年夏にBostonで開催されたISHA (International Society for Hip Arthroscopy) 2012で初めてお会いした方々です。突然のオファーにもかかわらず快よく訪問を受け入れていただき、正式に日仏整形外科学会交換留学生として訪問させていただくことになりました。紙面には書ききれない程多くの貴重な経験をさせていただきましたがその一部を報告させていただきます。



●写真1 Dr Nicolas Boninと初日職員食堂にて

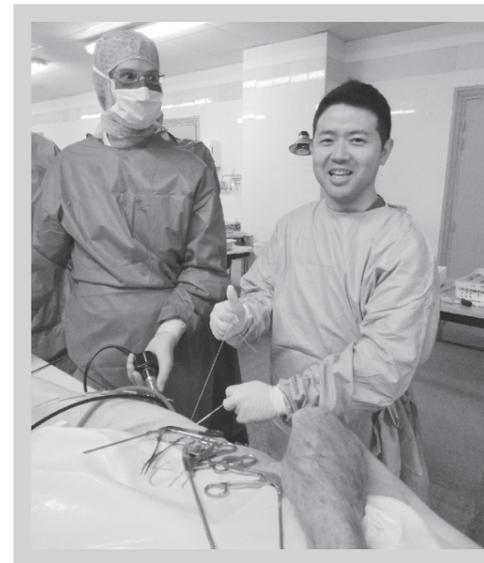
Lyon : LYON ORTHOCLINIC Dr. Nicolas Bonin

まず、最初の訪問先リヨンは都市圏150万人のフランス第2の都市で旧市街の風景がユネスコ世界遺産に登録されている非常に美しい都市です。星の王子様で有名なリヨン出身の作家サンテグジュペリにちなんで10年程前に空港名もサンテグジュペリ空港と命名され私のフランス紀行はここに降り立つ事から始まりました。LYON ORTHOCLINICはフランス全土に展開する巨大組織Capio groupに属するLyonの整形外科部門です。私はDr. Nicolas Bonin(写真1)に約3週間外来、病棟、手術、他諸々ほぼ密着して研修させていただきました。手術室は20部屋もあり整形外科を中心に他科のactivityも高くDr. Boninはそのうちの1部屋を使用し週2日の手



●写真2 FAI患者のDynamic impingement test

術日に1日4~5件程THA、hip arthroscopy中心に時々外傷や膝の手術も交え手術を行ってました。日本と同様にフランスも長寿国なのでTHAの患者さんの多くは高齢者ですが、日本に比べFAIによる変股症の患者が多く、30歳前後でTHAをうける患者さんも意外に多い事、その患者達が術後普通にスポーツに復帰しているのには驚きました。FAIの患者は、サッカー選手や空手・柔道・キックボクシング・テコンドー等格闘技系の患者さんが多く、ゴルフの患者さんが皆無なのが印象的でした。フランスではゴルフはあまり人気がないとの事でした。THAはすべてDAAで通常の手術台を使用して行ってきました。Hip arthroscopyはアメリカのDr. Philliponに師



●写真3 キャダパートレーニングにて

事した経験があるためフランス式ではなくアメリカ式に仰臥位でAL+MAPの2点法で行っており私が現在国内留学でお世話になっている産業医科大学若松病院の内田先生の方法と似たものでした。日本人と違い巨大なCam type FAIの患者が大半を占め、術後削り残しによる疼痛が残存しないようにDynamic impingement test(写真2)を行いながら徹底的にosteochondroplastyを行っており、そのこだわり様には感服しました。他の施設でも同様でしたがhip arthroscopy中に術中イメージを使わないのも特徴です。その他外来棟での誕生日を迎えたドクターのsurprising party、キャダパートレーニング参加(写真3)、スイス国境近くの田舎町GrenobleでTHA開発現場への参加、週末に南仏Carcassonneの巨大城塞都市への旅行、最後にDr.Bonin宅へご招待いただきご家族とLyonの郷土料理を堪能させていただき(写真4)、私のフランス留学は最高の幕開けとなりました。

Paris : CMC Paris V Dr. Fredelic Laude

Lyonでの素晴らしい思い出を胸にTGVで北西に約350km、次の訪問先Parisへ移動しました。住居は2つの訪問先の間に位置し、ノートルダム寺院のあるParis発祥の地シテ島からもほど近い絶好のロケーション4区マレ地区にアパートをかまえました。行ってから知ったのですが実はこの辺りはユダヤ人とゲイが多く暮らす地区で私のアパート周辺はユダヤ人の店やゲイ



●写真4 Dr.Bonin宅にてご家族とホームパーティー



●写真5 Medacta tableを使用したDAA THA

御用達のRainbow flagのお店が建ち並ぶ独特の界隈でした。滞在中大々的なゲイ祭もありましたが特に誘いを受ける事なく問題なく暮らすことができました。改めてフランス文化の広さを実感した次第です。2つめの訪問先CMC Paris VはParisの中心5区にあり、プチホテルのようなおしゃれな外観の病院でした。Dr. Fredelic LaudeはDr. Nicolas Bonin、後述のDr. Alexis Nogierの師匠でもありDAAによるTHAやHip arthroscopyはMedacta InternationalのMedacta tableという新型の牽引台を使用して行っておられました(写真5)。販売会社のラーニングセンターになっており、フランス国内はじめイギリス、イタリア、ドイツ等周辺各国からの見学者が頻りに訪れてました。Hip arthroscopyは最初に関節包外にアプローチし、それから関節包切開していく独自の方法で行っておられました。手術日は週2日ですが、スペシャルナースの協力のもと2つの手術室を無駄なく行き来し1日7~8件、THA、revision THA、PAO、hip arthroscopy等を驚く程手際よくこなしておられました。Dr. Laudeは自分で作製した小型飛行機で大空を飛ぶのが趣味というほど機械が得意のようで、対側の助手の代わりに油圧式アームレトラクターを開発し普段はスペシャルナースと二人だけですべての手術をこなしているとの事でした。その徹底した合理化は医者不足で嘆く日本でも見習う点が多いと思われました。普段はクールなイメージのDr. LaudeですがParisの大学に入学したばかりで医師志望の娘さんが見学に来られた時は手取り足取り父親として接しておられるのが印象的でした(写真6)。

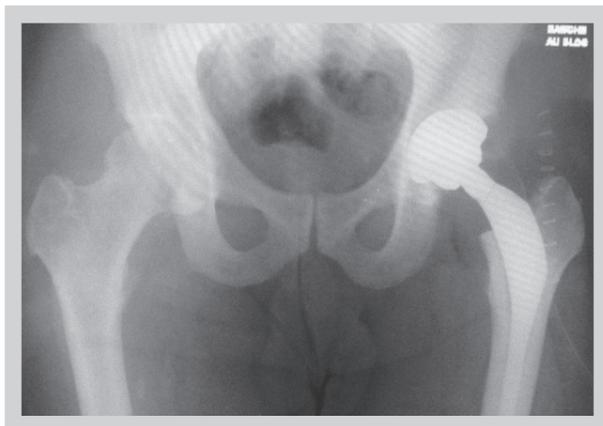


●写真6 Dr. Fredelic Laudeおよび医師志望の娘さんと

この時期のParisは夜の10時頃まで明るく病院終了後からでもParisの街を散策、音楽やバレエ等の鑑賞が可能で、週末にはノルマンディーやロワール地方まで遠出することもできました。特に関西医大和田先生のお薦めでParis日本大使館の医務官主催の“日本人医療関係者の集い”に参加させていただき、フランスに造詣が深い日本人の方々から日本人の視点から見たフランスについて貴重なお話をたくさん聞いたのは非常に貴重な経験でした。

Paris : Maussin Nolle Clinic Dr. Alexis Nogier, Dr. Thierry Boyer

3つめの訪問先Maussin-Nolle clinicではDr. Thierry BoyerのもとでHip症例は、若手のDr. Alexis Nogierが中心にこなしており、懇切丁寧に私の相手をしてくださいました。オリジナルのJudet tableを使用し希望する患者さんには少々高価なようですが、スイス製のCustom made stemでDAAによるTHAを行い、またhip arthroscopyはフランス特有のperipheral first techniqueを用いているのが特徴です。DAAによるCustom made stemを使用したTHA術後のX線写真はシンメトリーで美しく(写真7)、術後回復の早さ、可動域の良さ等早期に社会復帰を望むフランス人のニーズを十分に満たす最高のアイテムと思われました。Peripheral first techniqueによるhip arthroscopyは、世界的にも稀なフランスオリジナルのテクニックで最初に関節包切開と大腿骨辺縁の処置をしっかり行い、その後無理のない軽い牽引で関節面を開いてからcentral compartmentを

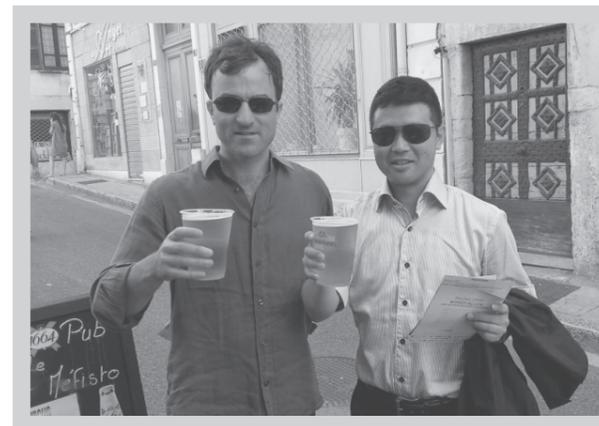


●写真7 Custom made stemを使用DAA THA術後Xray

行う方法です。術野が極めて良好なため術中透視も必要としません。非常に低侵襲で合併症を極力抑える点で優れた方法と思われました。2ヵ月に1回ほどhip arthroscopyセミナーを開催しているのですが、私もこのセミナーに参加させていただきました。この日はドイツ国境沿いのStrasbourg大学整形外科から2名、エストニアのスポーツドクター1名と私の計4名の受講で1日に6件のhip arthroscopyと合間にHip arthroscopyの講義を挟みとても充実した内容でした。手術の時に驚いたのは非常に優秀な整形外科や麻酔科のスペシャルナースの存在でした。ほぼfixでチームを組んで阿吽の呼吸で手術を行っていました(写真8)。Dr. Alexis Nogierやその秘書さんには非常に親身に接していただきました。仕事の合間のCaféでランチ、研修終盤にはLyon近くのVienneのご実家に招待していただき古代ローマン



●写真8 左から整形外科スペシャルナースMila、麻酔科スペシャルナース、Dr. Alexis Nogier、著者



●写真9 Vienne Jazz festival 開場前Dr. Nogierと一杯

アターで開催される世界的Jazz festivalに連れて行っていただいたり(写真9)、奥さんのご実家の南仏Orangeの別荘にも連れて行っていただき一緒にバカンスさせていただきました(写真10)。フランス人のプライベートにも同行させていただき、最高の形でフランス滞在を締めくくる事ができました。

おわりに

当初はフランス人という敷居が高い存在に思っていました。実際に会って一緒に過ごしみると想像以上に気さくで家族をはじめ人とのつながりを大事にしていることが良くわかりました。医療のみならず、私生活にも密着しフランス人の心の豊かさ暖かさを知り、成熟したフランスの社交文化を体験することができました。数人のドクターとは再会を誓うまで親密になれた事は私の人生においても大きな宝となりました。今回の訪問でフランス人は日本文化にも非常に興味をもっていることを知りました。2020年東京オリンピックも控えており今後彼らが日本にやって来た際には日本文化を紹介し、恩返しできればと思っております。

このような貴重な経験をさせていただいた日仏整形外科学会の会長の小林晶先生はじめ、担当していただいた大橋弘嗣先生、藤原憲太先生他スタッフの先生方、留学への後押しをしてくださった仙台赤十字病院整形外科北純先生、小池洋一先生に深謝するとともに日仏整形外科学会の一員として今後もフランス人との交流を続けていければと思っております。ありがとうございました。



●写真10 南仏OrangeのDr. Nogierの奥さんのご実家の別荘と一緒にバカンス

フランスの脊椎外科と文化にふれた旅

順天堂大学整形外科
百村 励 先生

はじめに

H25年4月から3か月間の日程で、パリ、ボルドーにて研修をさせていただきました。最初の6週間をパリのRobert-Debre病院にて主に小児の側弯症について、後半の6週間はボルドーのPellegrin病院で成人の脊椎疾患全般について勉強させていただきました。

この研修で最も有意義と思ったことは、フランス脊椎の第一人者たちと交流をもてたことです。Robert-Debreでは若手を代表する脊椎外科医であるDr. Ilharrebordeにつきっきりで、彼は外来から手術まで自分の理論を事細かに説明してくれました。Pellegrin病院では、ベテラン教授であるProf. Vitalにご指導いただき、手術ではDr. Obeidの手技を中心に見学しました。いずれの先生も、たくさんの論文を執筆されておられるので、研修前からそのお名前を学会などで耳にすることが多く、実際に交流をもてたことは素晴らしい経験で、これからの財産と考えています。

また、海外でのこれほどの期間の滞在が初めてであった私にとって、この旅ではフランスのみならずヨーロッパの様々な文化に触れることもできました。研修前から文化に触れることもこの研修の醍醐味だと、たくさんの日仏整形外科学会の先生方にアドバイスをいただいておりますが、まさにその通りだと感じました。

このような機会を与えてくださった日仏整形外科学会の皆様には大変感謝しております。まずは、この滞在報告記が次に交換研修を希望される先生の参考となり、その意欲を刺激するものになれば幸いです、す

でに研修に行かれた先生や他の日仏整形外科学会員の方たちにも楽しんでいただければ本望です。

準備期間

当教室の金子教授が我々教室員にフランスの魅力をたくさん伝えてくださるおかげで、我々の多くがフランス整形外科に興味を抱くようになりました。私ももちろん例外ではなく、3年ほど前からフランスに研修に行かせていただく機会を心待ちにしていました。その準備として、まず1年半ぐらい、週1回のペースでフランス語教室に通いました。このINFOSに掲載された他の先生の報告記から、ディスカッションに参加できるほどのフランス語の習得は難しいと考えていたため、最低限の日常会話とともに、特に数字の習得を入念に行いました。後にこの数字の習得はとっても役にたったと思っています。フランスでのカンファレンスで、医学用語はなんとなく耳に入ってきて、更に側弯症や脊椎アライメントの話では数字だらけのため、理解するのに大きく役立ちました。ちなみに1年半の語学教室でも、日常会話はレストランで困らない程度にしかありませんでした。

パリにて

冒頭でも書きましたが、パリではRobert-Debre病院という小児病院で研修させていただきました。小児病院ということで、明るい雰囲気が作られており、建物

内に生い茂る木々が印象的でした(写真1)。こちらの病院で脊椎を担当されておられるのがProf. MazdaとDr. Ilharrebordeの2名のみにもかかわらず、年間400件近い側弯症手術を行っています。お二人の論文を数多く拝読して準備し、その内容から勝手にかなりのベテランドクターを想像していたのですが、最初の待ち合わせ場所に現れたDr. Ilharrebordeはなんと私と同世代(のちに1歳差とわかりました)の青年医師でした(写真2)。彼との出会いが、最終的にこの研修のクライマックスでした。滞在期間中に、フランス脊椎外科の権威でおられるDr. Duboussetにお会いした際、Dr. Ilharrebordeは今後のフランス脊椎を背負って立つ男と話されていました。同世代でもこれだけできる人がいるんだというのが、いまの自分の大きな刺激になっています。

Robert-Debre病院では毎朝8時からカンファレンスがあります。特に火曜日は、新入院患者のカンファレンス後に、リサーチカンファレンスであったり、脊椎カンファレンスであったりと、午前中いっぱいを使ってずっとカンファレンスでした。日本でこれだけ長い時間のカンファレンスでは飽きてしまうかと思いますが、このカンファレンスが私にとっては実に楽しいものでした。特に脊椎カンファレンスでは、Prof. Mazda、Dr. Ilharreborde、研修医の先生たちと私というメンバーなので、私のために英語でプレゼンテーションやディスカッションをしていただき、いろいろな症例で、まず私の意見から聞いてくれました。私が側弯症の固

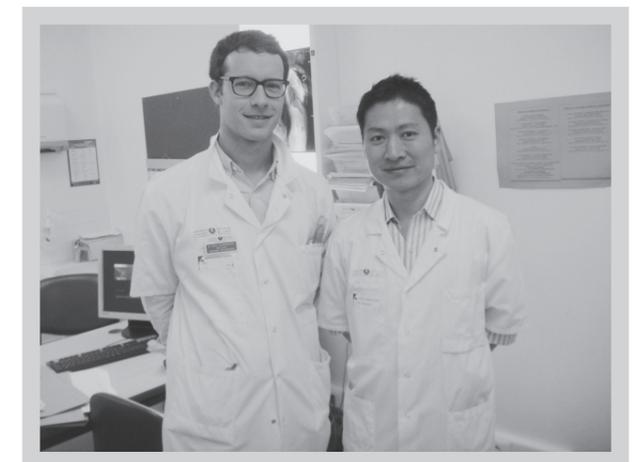
定範囲など自分の考えを発言すると、自分たちのデータや過去の報告に基づいて実に理論的に反論され、それがあまりに筋の通った反論なので、なんだか逆にうれしくなる自分がありました。余談ですが、パリで脊椎の手術をしている別の病院に見学に行った際、Prof. Mazdaはキングと呼ばれていると教えてくれました。脊椎の学会などで、圧倒的な知識と経験で意見するため、他の先生が立ち入る隙がないとのことでした。Prof. MazdaとDr. Ilharrebordeの二人とのディスカッションの機会を得たことはとても有意義であったと思います。

手術ではいくつかのオリジナルのインストゥルメントを用い、一つ一つの手技を英語で解説しながら行っていたので、それなので飽きることもなくあっという間に時間が過ぎていきました。私が最も感銘したのは術野の展開で、開創器などを実に効果的に使用し、無血野で、とってもきれいな手術でした。特発性側弯症の手術では、術中出血量は150ccほどで、これは他の報告などから考えてもかなり少ない方だと思います。

また、外来での側弯症診察もとても興味深いものでした。フランスらしい(?)と感じたのは、側弯症でも大事にしているのは矢状面で、レントゲンのみならず、実際の身体所見でも矢状面を入念にチェックしていました。Dr. Ilharrebordeはすべての患者に、「日本から側弯症のドクターが来ているから英語で彼に説明しながら診察します」とことわりを入れてから診察を始めてくださり、その言葉通り、カルテに記載する内容の



●写真1 Robert-Debre病院内



●写真2 Dr. Ilharreborde

すべてを英語で言葉にしながら説明してくれました。特に、装具治療において、将来的な手術を予定しているが、腰椎のflexibilityを保って固定範囲を小さくするために装具をしているという考え方や、側弯症の進行予測に矢状面を考慮しているところなどが印象的でした。このような考え方を聞いているうちに、私が日本に帰ってからやりたいと思うリサーチテーマが次々に浮かんできました。

学会で先生たちが不在のときには、他の施設に見学に行く手配もしてくれました。あるときは成人脊柱変形で有名なProf. GuiguiがおられるBeaujon病院に手術見学に行き、またあるときは側弯症の装具を作っている会社にも見学に行きました。どこも新鮮で、しかも親切に説明してくれました。いろいろな施設に行くことで、フランスの脊椎外科の特徴がわかっていきました。

■ ボルドーにて

後半の6週間はボルドーに移りました。ボルドーは人口が17万人ぐらいの都市ですが、とっても活気があり、それでいて治安のいいところで、滞在中も危険を感じることは全くありませんでした(パリではスリに会い、間一髪のところ逃げました)。きれいな街並みは、ただ散歩するだけでも飽きることはなく、またトラムでの移動もできるのでとっても過ごしやすかったです(写真3)。偶然ですが、私が日本で通っていた



●写真3 ボルドーの名所 (Miroir d'eau)

フランス語学校の先生が、日本での仕事を辞めてボルドーに住んでいたため、私の滞在中にはたくさんお世話になりました。ボルドーといえばもちろんワインです。私はワインの知識はほぼゼロで行ったのですが、その先生にたくさんのワイナリーに連れて行っていただき、ボルドーワイン通となって帰ってきたつもりです。

ボルドーのPellegrin病院は年間2,000件を超える脊椎手術を行っている病院で、この件数はここ数年ではフランスで1番の件数です。疾患も多種多様で、ドクターも多く、3人の教授がおられます。主任教授でおられるProf. Vitalはスタッフの誰からも尊敬される紳士な先生で、滞在中にはかなり気にかけてくださいました(写真4)。Prof. Gilleは寡黙な先生で、胸椎の外傷後の脊柱変形に対する骨切り矯正のような難しい手術も何気なくさらっと終わっていた印象でした。Prof. Pointillartは、この年のCSRS-ES(Cervical Spine Research Society - European Section)の学会長を務められ、その学会の受付を自らされておられるなどとても謙虚で気さくな先生で、私が滞在中にも何度かお食事に連れて行って



●写真4 Prof. Vital

いただきました。この他に4人の先生と5人の研修医というスタッフの構成で、その他に私のような研修生や見学者がいつも数名はいるという状況でした。たまたま私と同一期間に研修していたのがポルトガルから来ていた2名の先生で、彼らはポルトガル語の他にフランス語や英語も堪能だったので、私は彼らにかなり助けられました。

手術は毎日ほぼ3列並列で行われており、私はその中でも特に件数の多かった頸椎前方手術や、Dr. Obeidが主に行う脊柱変形の矯正手術を好んで入れていただいていた。卒後10年弱の先生でもほとんどすべての手術を術者として完遂している姿をみて、この病院で腕を磨いた先生の実力を見せつけられた気がしました。

こちらの病院でもカンファレンスは入念に行われていました。月曜日は朝と夕方にカンファレンスがあり、朝は新入院患者のカンファレンス、夕方は抄読会の形式でした。この抄読会が実に教育的で、研修医の先生が読んだ論文を自分の演題のようにスライドを作成して発表するというものでした。水曜日の夕方にあるカンファレンスは、翌週の手術症例すべてを検討するもので、1週間で50件ぐらいの脊椎手術があるので、このカンファレンスはかなり長時間にわたるものでした。また、毎週水曜日は教授回診があり、更に毎日夕方には次の日の手術患者のところへ術者が回診に行くので、それらに同伴していると、どのような手術になるのかの理解が深まりました。このようにカンファレンスや



●写真5 Château Margaux前にて

回診が日本と同様に緻密に行われていることは、私にとってはやや驚きでした。

■ 週末の過ごし方

3か月という短い期間でしたが、週末にはヨーロッパの中のいろんな地域へ行きました。パリからはもちろんどこに行く交通手段も整っているの、飛行機や電車を使い、プラハやバルセロナなどいろいろな文化に触れることができました。私はサッカー観戦が趣味なので、パリサンジェルマン(この年のリーグ優勝)やバルセロナ(こちらもリーグ優勝)の試合はかなり興奮しました。ボルドーからはパリほど交通機関が充実しているわけではないので、近郊に出かけることが多かったのですが、それでも十分に見どころがたくさんありました。サンテミリオンやメドック地区などでシャトー訪問を楽しみ(写真5)、リゾート地であるアーカッションやビアリッツではのんびりと過ごすことができました。物価が高いことが難点ですが、またとない機会なので奮発しました。

■ おわりに

冒頭でも述べましたが、この研修を通じ、たくさんの方と知り合えたことが私にとってこの研修で最大の収穫であったと思います。小林晶先生、金子和夫教授をはじめとする日仏整形外科学会の先生方、特に藤原憲太先生、弓削至先生には私の訪問先について大変ご尽力いただき、この場で改めてお礼申し上げますとともに、今後も多方面で交流をもたせていただければ幸いです。また、私が訪問した施設にはその後も次から次へと希望者がおられ、その方たちとも輪が広がっていくのがとてもうれしく思います。そして、フランスで出会った先生方のようになりたいというのが、いまの私の糧となっています。いつか彼らに追いつき、また再会したいと考えています。

フランス留学帰国報告

東京医科歯科大学大学院臨床解剖学分野(整形外科)
二村 昭元 先生

はじめに

平成25年度日仏整形外科学会の交換研修に申請し、1月より2か月間Lyonにて、1ヶ月間Rouenにて研修を行ってまいりましたので報告させていただきます。私整形外科医ですが、所属にもありますように二足のわらじで解剖学者でもあります。その仕事の縁あ

り第15回日仏整形外科学会会長であられる松戸市立病院の飯田哲先生に「留学したことないなら申請してみたら？」とお誘いを受けたことがきっかけでした。フランスにはいくつかの思い出がありました。臨床的には肩関節外科医として、今後日本に導入されるはずのReverse shoulder arthroplasty (RSA)を一度発祥の地で直に見てみたいと思っていたこと、Surgical &



●写真1 Centre Orthopédique SantyにてDr. Gilles WALCHと

Radiologic Anatomyという解剖雑誌のEditor in ChiefをなされているProf. Fabrice DUPARCと上司である秋田恵一教授との間で面識があったこと、また私的には妹がフランスに数年間暮らしていたことなども重なりすぐに留学申請を決めました。

まず肩臨床としてはLyonのDr. Gilles WALCHのところにどうしても行きたいと思っていました。世界的人気で混み具合では厳しいと危惧されていたのですが、以前一年間のフェローをされていた水野直子先生のご助力により2013年1、2月の受け入れを快諾いただきました。前述のRouenのProf. DUPARCは秋田教授により直接依頼していただき3月に1ヶ月間受け入れて頂くことになりました。

Lyonでの研修 (Dr. Gilles WALCH)

最初の訪問地Lyonはフランスの南東部に位置する、Parisに続く第2の都市そして食の都として有名であります。またホストのDr. WALCHに関しても日仏学会により過去にも多くの訪問者がいるので、ご紹介するま

でも無いと思いますが、フランスのみならず世界各国より招聘される最も高名な肩関節外科医といってもよく、特に人工関節に関する知見、手技は圧巻であります。外来をされてるCentre Orthopédique SantyのDr. WALCHの部屋ではじめて面会すると手術や外来のattendについて丁寧に説明して頂けただけでもその人柄に感じるものがありました(写真1)。火曜日はHôpital privé Jean Mermozにて手術です。朝6:30より恒例の症例呈示をDr. WALCH自らしていただきました。午前中は不安定症に対するLatarjet法や人工関節、午後は腱板縫合や長頭腱固定・腱切離などの鏡視下手術で一日7、8件の手術をされておりました。印象的であったのはその手術手技を毎回ポイントごとに、同じ文言・タイミングで誰にでも説明してくれることではありません。Latarjet法では骨片が関節内に突出していないか、人工関節では肩甲下筋腱の切離前に腋窩神経が確認できるかなどを手洗いしたビクターに必ず確認させてくれました。他の曜日は非常に精巧な鏡視下技術を持ち物腰柔らかなDr. GODENÈCHEやどんな症例にも果敢に自信をもって挑み、それを非常に流暢な英語で説明



●写真2 Lyon旧市街のBouchonにて 各国フェロー(イタリア、ブラジル、アルゼンチン、日本)と熱く肩・膝について語りました

してくれる Dr. NEYTONの手術を朝から晩まで見学することができ、他のドクターの手術を見て、ディスカッションしながら改めて自分の術式やコンセプトを再考する非常に良い経験となりました。

Dr. WALCHは本当に世界的な活躍をされていて、火曜の手術日には様々な国からゲスト(フランス内、アメリカ、イギリス、イタリア、アルゼンチン、日本など)が来たり、イベント(Dallas, Texasの先生とのWeb会議であったり、ヨーロッパ内からドクターを招待してライブサージャリーを院内で行ったり)がありました。2月にはParisで第1回のInternational Shoulder Courseなる肩人工関節に特化した学会があり、その中でもDr. WALCHは完全な指導的な立場でありステージ上に出ずっぱりでした。その恩恵とFacebook!のおかげもあって各国のvisitorと非常に仲良くなることができました。病院のみならず週末には世界各国よりのvisitor皆でLyon旧市街のBouchonとよばれる伝統的なレストランに繰り出し、各国の肩関節治療について熱く語り合えたのも何事にも代えがたき経験となりました(写真2)。Dr. WALCHがそんな各国からのビジターを前に手洗い

しながら「肩の臨床は宗教と同じ。カトリックもあればプロテスタントもいる。ユダヤ教もあればイスラム教も。どれがいいということはなく、皆がその土地の状況で信じる主義で尽くせばよいと思う。自分の言うことは絶対ではないよ」と言った言葉が非常に心に残りました。私的にはBeaune, Amsterdam, Parisなど観光できたのと、同時期にLyonに滞在中であった東名厚木病院の成尾先生とはちや整形の村枿先生にワインを飲みながらお相手していただいたのも楽しい思い出となりました。季節的に寒いながらも1、2月の2ヶ月をすごし名残惜しくもRouenへと移動しました。

■ Rouenでの研修 (Prof. Fabrice DUPARC)

2番目の訪問地RouenはParisより北西へ電車で1.5時間に位置するノルマンディー公国の首都として栄えた街であり、Jeanne d'Arc終焉の地、Monetの描いたノートルダム寺院などで知られています。ホストのProf. Fabrice DUPARCはUniversité de Rouenの解剖学の教授で



●写真3 Prof. DUPARCのご自宅にて 暖炉のある大変素敵なお宅でした

あると同時に、整形外科臨床医(肩・肘・スポーツ)であります。週5日のうち月・木は主に学生、看護師相手の講義や前述の雑誌editor in chiefの仕事了解剖学者として、残りは外来・手術を臨床家としてこなし、非常に多忙な日々を過ごしていらっしゃいました。そのような中でも学内宿舎の手配、ご自宅でのランチの招待(写真3)や日々の帯同スケジュールなど驚くほど親身に面倒をみていただき本当にホストに恵まれた研修であったと感じます。印象深いのは医学部1年生(600人は大講堂で、残りの600人はストリーミングで)への解剖講義でした。大きな昔ながらの黒板を目一杯用いてチョークで両手!!で持って板書していきます。フランス語で理解はできなかったのですが、5分に一度ぐらいの頻度で笑い声、たまに拍手喝采が起こっており、あとで卒業生である整形レジデントに聞いてみると、学内でも名物講義、教官であったそうです。授業の最後には学生が一挙に黒板前におりてきて、板書を真剣にデジカメに収める姿はロックスターさながらでありました(写真4)。

臨床では他のフランス肩外科医同様“biceps killer”でありましたが、“V-self locking tenodesis”と呼ぶV

の字に関節唇から上腕二頭筋長頭腱を剥離して腱切離を行い、アンカーや縫合を行わないで腱固定を行う方法や、Outerbridge-Kashiwagi法(肘頭窩を後方から穿孔して上腕骨の前後を郭清)の鏡視下手術などバラエティーに富んだ手術をchallengingに行っており大変勉強になりました。

■ さいごに

約3か月間、日本での臨床を離れフランスで肩・肘関節外科ならびに解剖学者としての研修を大変有意義に行うことができました。本学からは恐らく初めての研修者になると思います。留守にしておいて言うのもなんですが3ヶ月間は短期で医局人事調整への負担も比較的軽く済みます。このように様々な経験をできるこの研修システムについて声を大にして医局内で宣伝させていただきたいと思います。貴重な機会を与えてくださった日仏整形外科学会の役員先生方、渡仏を快諾してくださった秋田教授、大川教授、留守中業務をご負担いただいた解剖・整形教室スタッフに厚くお礼を申し上げます。



●写真4 Prof. DUPARCの解剖学講義 講義が終わるとロックスターさながらに学生が押し寄せる様子は壮観

交換研修渡航記

大阪府立母子保健総合医療センターリハビリテーション科
田村太資先生

はじめに

この度日仏整形外科学会による医師交換研修にて、2013年9月から11月末までの3か月間、パリ市内の3施設を訪問しましたので、ここに報告致します。

Hôpital européen Georges-Pompidou (HEGP)

最初の訪問先はHôpital européen Georges-Pompidou (HEGP)でした。ここはパリと周辺地区の医療サービ

スを提供するAP-HPの中で最も新しい病院で、2000年に老朽化したパリ市内の3病院と1病院の整形外科・救急部門を統合する形で設立されました。病院はシトロエン自動車工場の跡地の一部にあり、日本にありがちな「背の高い」病院ではなく、9階建て826床の「横に広くゆったりとした」病院です。ちなみに残りの部分はシトロエン公園として整備され、市民に親しまれています。観光客には気球がある公園として有名です。整形外科はこの建物の7階(フランスで言うところの6階)にあり、外来・入院病棟・医局のすべてが同じフロアにあります。医師の移動の導線としては非常に短く便



●近代的なHôpital européen Georges-Pompidou (HEGP)

利で、整形外科と言えば1階の玄関近くにあると言った日本の病院のイメージからかけ離れており新鮮でした。

こちらでは手の外科・末梢神経外科を担当されているPr. Emmanuel Masméjean先生に受け入れていただき、成人の手外科領域を見学させていただきました。普段小児整形外科を生業にしている私にとっては、ほぼ10年ぶりの成人症例との対面となりました。一週間の流れとしては、どの常勤医師も、週1度の外来日と週2~3日程度の手術日をこなすといった感じでした。Masméjean先生の外来は木曜日の1日で、月曜日・水曜日が外来手術日、火曜日が入院の必要となる患者の手術日でした。外来手術とは言いますが、日本では1泊2日の入院で実施する尺骨神経前方移行術や広範な癒痕形成術などの全身麻酔症例が、午前中に手術を実施し午後退院といった体制で実施しているのには驚きでした。腸骨移植を併用する手関節固定術や手指人工関節置換術など入院が必要となる症例でも、手外科症例は全例翌日退院、人工関節症例でも3~4日で退院するとのことでした。その後は通院で処置を実施するようです。術後1週程度の四肢多発外傷後の患者さんが、創外固定のまま民間救急車に乗って処置に来院していたのが印象的でした。

Masméjean先生はIntern終了後1年間アメリカで研修されていたこともあり、非常に英語が堪能で、一つ一

つの症例について説明していただきました。手術においても手際よく数多くの症例をこなされていました。

「手外科・末梢神経外科」を標榜しているだけあってか、Entrapment Neuropathyの手術は非常に多かったのですが、Ulnar abutmentやShoulder impingementの症例も多くあり、これらは関節鏡視下に手術されていました。症例についてもパリ近郊のみならず、遠くアフリカからの患者も多くいました。特に2011年のリビア騒乱以降、リビアからの患者が増えたとのことでした。これらの患者はほとんどが銃損傷後や熱傷後で、神経血管損傷修復後の癒痕修正などが最近増加しているとのことでした。また、モロッコやセネガル、マリ、コンゴなどの旧フランス領のアフリカ諸国やニューカレドニア・タヒチからの患者も来ているとのことでした。旧フランス帝国・フランス語圏の広さを思い知らされました。

今回Masméjean先生にとっては初めての日仏整形外科学会交換医師となりましたが、病院内での研修のみならず、日々の生活においても非常に気をかけていただきました。フランスについて不慣れな時期の私としては、心強くもあり、非常に助かりました。またMasméjean先生には御自宅にもお招きいただき、楽しい時間を過ごすこともできました。



●Masméjean先生と

Hôpital Necker Enfants-Malades

続く訪問先はパリ市15区内Montparnasse駅近くのNecker小児病院でした。こちらには2年前の交換研修で沖縄南部医療センターこども医療センターの金城先生が訪問されておられます。教室主宰のC.GLORION先生のもと、3人のPU-PHと4人のPH、8人のAttache、3人のPost internに加えて、6人のInternが所属する大所帯でした。こちらでは前回訪問された金城先生と同じくPr. Philippe Wicart先生が受け入れをしてくださりました。Wicart先生はAFJO exchange fellowとして1994年来日されており、山口大学と金沢大学を訪問されていたようです。その後St-Vincent de Paul病院を経て、2010年より小児病院統廃合にともないNecker小児病院に移られています。自身がFellowとして来日されていたこともあってFellowの受け入れにも積極的で、私が本交換研修システムで3人目のFellowとなりました。Wicart先生は以前にも増して精力的に外来・手術をこなされているようでした。

Necker小児病院での一日はHEGPと同じく、朝のカンファレンスから始まります。カンファレンスでは前日の手術症例に加えて昨晚の救急来院症例も提示され、「一体一晩に何人の外傷患者の手術をしたんだ?」とびっくりするような日もありました。その後、外来・

手術と分かれて各々の業務をこなしています。外来は各医師が週1~2回の半日枠を持っているようですが、Wicart先生は金曜日の午後半日に加えて、月曜日・火曜日は午前から午後半ばまで休みなく外来をこなされていました。さらに土曜日にも月に何度かは終日外来をされているようです。手術は通常2室を使用し、朝から夕方まで埋まっていた。さらに日帰り手術を主体に行う外来手術棟にも手術枠が有り、月に6~8日間の利用でギプスの巻き替えから足根骨癒合症手術まで実施されていました。すべての手術は予定時間内に終わるよう、厳しく言われているようで、2日続けて19時を超えてしまった翌週には手術室を代表して麻酔科からクレームが来ていたようです。またHEGPと同じく、17時以降から2時間以上かかる手術を実施することは難しいようで、私の滞在中も1例手術が延期となっていました。そして、月曜日と火曜日には翌週手術症例のカンファレンスが18時から開始され、20時半から21時頃まで続きます。前月訪問したHEGPでは、Internも含めて当直以外のほとんどの医師が20時頃までには帰宅していたので、フランスとはいえ、小児に携わるものは日本同様忙しいということに気付かされました。

Necker病院で扱う疾患は、整形外科が扱うすべての分野に及んでいますが、とりわけ側弯症などの小児脊椎疾患、DDH・ペルテス病などの股関節疾患、内反足・



●古さと新しさが同居したHôpital Necker Enfants-Malades

外反足などの足部疾患が中心のようでした。また小児がん拠点病院であることより肉腫の広範切除・再建や、上肢先天異常なども取り扱っていますが、さほど症例は多くないようでした。特に肉腫はパリ市内に3つ中核となる施設があり、その各々が自分たちの方針で治療をしているとのことでした。

滞在中、ほぼ毎日Wicart先生について回りました。月・火曜日の外来では多くの足部変形患者が来院し、診察を受けておられました。特に先天性内反足にはFrench methodsと呼ばれるフランス独自の治療法で治療されており、そのすべてを理解することは当然無理でしたが、一部を垣間見ることができたのは良い経験でした。また、CMT患者の凹足に対するギプス矯正についても何度か目にすることができ、実際に何をやっているのかを理解することができました。さらに外反扁平足に対しても非常に積極的に治療されており、今までの自分の中であった治療方針に対する問題提起にもなりました。

Clinique Jouvenet

最後の訪問先は16区にあるClinique Jouvenetでした。ここはパリきっての手の外科の聖地として、説明が不要くらい有名な施設です。1957年設立のPrivate

hospitalで現在は整形外科全般と眼科の治療を行っています。両科ともActivityは非常に高く、Le Point誌の代表病院にもほぼ毎年選ばれています。上肢部門であるInstitute de la Mainには現在13人の手の外科専門医が所属し、各々が独自に治療を展開しております。すなわち手根管症候群の治療であれば、Open・1 portal・2 portalすべてを見ることが出来ます。ここではPr Alain Gilbert先生に受け入れしていただき、Gilbert先生とDr Caroline Leclercq先生の治療を中心に研修しました。Gilbert先生は私の上肢である川端秀彦先生と旧知の仲であり、小児先天異常や分娩麻痺など似通った分野を治療されており、今回の訪問となりました。

今まで研修した公立病院であるAP-HP所属病院とは異なり、病院内は非常にゆったりとした雰囲気が流れており、パリ16区という高級住宅街に囲まれた立地と併せて、さすがはパリ有数のprivate hospitalと言った趣でした。外来は診察室と処置室に分かれており、初診患者は診察室で、その他は処置室で診察されていました。週2回の診察日にGilbert先生はスーツで過ごされており、間接照明中心で調度品も木製のおしゃれな診察室との組み合わせは、あたかも映画の整会の「顧客がやってきた弁護士」という様子です。患者層はパリ市内(病院周辺の西部地区)やイルドフランスが主で、遠方ではサウジアラビアやクエートなどの湾岸諸国か



●Wicart先生と

らの患者が多いとのことでした。HEGPとは異なり、費用などの問題からリビアやアルジェリアからの患者は少ないそうです。さすがはPrivate hospitalと妙に納得してしまいました。

手術室は地下1階にあり全部で10室ありましたが、それぞれにフランスを代表する画家の名前が付いていました。通常1人の術者が2つの手術室を渡り歩く格好で手術をこなし、簡単な手術であれば午前中に7~8例ほどこなしておりました。下肢人工関節でも1日に6~7例は普通にこなしているようです。手術は各術者とその月担当の研修2名が入るシステムで、公立病院とは違い術者が必ず執刀しておりました。症例はGilbert先生が専門とされる小児先天性疾患・Leclercq先生が専門とされる麻痺疾患を中心として、各々の先生が手外科全般の症例の治療に当たっておられました。HEGPでもそうでしたが、Dupuytren拘縮症例の多さには圧倒されました。またGilbert先生が「何でも手関節鏡で直す」と紹介したPr Christophe Mathoulin先生による手関節鏡での舟状骨偽関節手術や舟状月状関節靭帯再建を見学できたのも収穫でした。ただ、一方の目的であった分娩麻痺や腕神経叢損傷後の修復については訪問時期にはよい症例がなく、Gilbert先生の手さばきを見ることは叶いませんでした。特に分娩麻痺はフランスを含めたヨーロッパ全体での発生件数が著し

く減少しており、アフリカやベトナムなどを訪問し当地でまとめて手術をされているようです。

手術室にはフランス語圏を中心に外国の医師が多数見学に訪れるようで、私が滞在した時期だけでもアルジェリア・チュニジア・モロッコ等から整形外科医が来られていました。またフランス語を話せるのであれば海外からのレジデントも受けており、Leclercq先生にはチリからの医師が付いていました。

建物は築後40年以上経過していると思われ、外見は味わい深いものとなっていましたが、内部は適宜改装を続けられているようで、入院病棟も居心地良さそうな個室が並ぶ姿が印象的でした。入院期間なども「いついつ以降退院可能だけど、もう少しいてもいいよ」的な説明がされており、ベッドを回し続けないといけない公立病院と、患者のHospitalityに重きをおく(その分費用も取る)Private病院との違いを垣間見ることができました。

■ ■ ■ 日々の生活

今回はパリ市内、それも15区と16区の病院の訪問であり、居住地については変更する必要がないようでしたので、家族で3ヶ月間を過ごすこととしました。ただ、我が家には小学校3年生になる就学児がいるために、

学校面について考慮する必要がありました。幸いパリには日本人学校があり、こちらでお世話になりました。パリ日本人学校は日仏文化学院が設立母体となって、1974年にTorocaderoの日本人大使館跡に設立されました。その後1990年に現在のVersailles近郊に移転し現在に至るそうです。たった3か月の滞在でありましたが、教職員の方々・父母の方々に快く受け入れていただきました。妻も知り合いの全くいない異境の地で、父母の会を通じて知り合いができ有意義に過ごせたようです。また3か月の滞在中に娘の3歳の誕生日を迎えることとなり、イチゴショートホールケーキ(パリではまずお目にかかることができない!)を手に入れるべくヤマザキパンパリ支店まで出かけたり、日本人学校の文化祭に参加したり、家族同伴でなければ体験できないことも数多く経験できました。(帰国2週間前に息子が胃腸炎を貰ってくるという笑えないような出来事もありましたが)

家族でパリ市内を動くとき、ベビーカーを使用する子連れのため、バスが中心となりました。ガイドブックにはわかりにくいと酷評されるバスですが、メトロに比較すると平面の移動のみで、客層も高齢者や子連れ中心で、非常に安全でお勧めです(特に深夜は地下鉄・タクシーとも使いづらく、深夜バスがお勧めです)。各病院への通勤にはメトロを利用しましたが、Navigo

Decouverteという旅行者用の非接触型ICカードを利用しました。これを使うと週末はイルドフランスすべての区間の利用が可能となります。日々の美術館巡りや週末の小旅行の際に重宝しました。パリ圏内の交通機関については専用のガイドブックが安価に売っており、また携帯アプリも便利に利用できます。

■ ■ ■ さいごに

異文化を知る、と意気込みパリで過ごした3か月でした。帰って直後の感想は「なんて日本って安全で便利なんだ」でしたが、日を追うごとにフランス人なりの合理性に改めて納得できる場面が増えました。この経験を糧に、今後の生活、そして医療に役立てたいと思います。

このような貴重な機会を与えてくださった日仏整形外科学会の諸先生方、さらに私自身が公務員に準ずる身分で有りながら、3か月の長期にわたり快く送り出してくださった大阪府立母子保健総合医療センター整形外科部長川端秀彦先生に感謝申し上げます。



●趣あるClinique Jouvelet



●Gilbert先生と

第88回SOFCOTに参加して

2013年のSOFCOTは11月11日から14日までいつものParis, Porte MaillotにあるPalais Des Congrèsで行われました。今回は日本から10名程の先生が参加され、徐々に日本からの参加が増えてきているように思いましたので、少しSOFCOTについて紹介したいと思います。

SOFCOTはフランス整形災害外科学会、日本で言えば日本整形外科学会(JOA)にあたります。年に一度、同じ時期に同じ会場で行われます。口演会場は9つ、他にe-posterや企業展示があります。発表は基本的にはフランス語です。シンポジウムやラウンドテーブル、一般演題はJOAと同じですが、他に症例検討などもあります。また、いろいろな専門分野の分科会が一日かけて行われ、興味のある分野について口演やシンポジウムをまとめて聞くこともできます。全体的には日本と比べると発表後の質疑応答が活発なように思いますが、それでも最終的には時間延長せずに終わるところがフランス的なようにも思います。

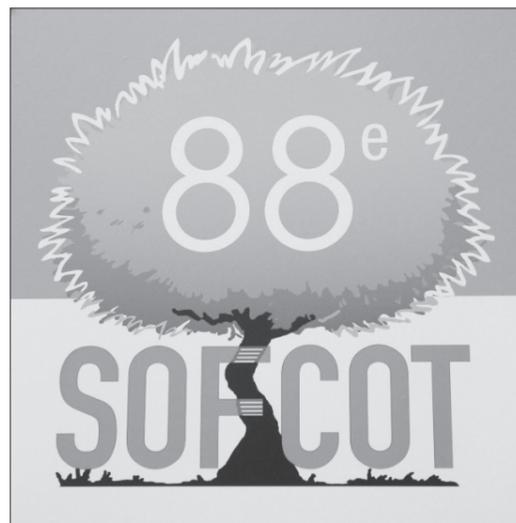
また、毎年招待国が決められ、その国のセッションが設けられます。日本はCaton先生が会長をされました2010年に招待国にしていただき、日本セッションを行いました。今回はイギリスが招待国となっていて、来

年はアメリカとのことでした。

企業展示ではフランス独特の器械や日本に入っていないインプラントなどの展示もあります。ここでは大概は英語も通じます。かつてはシャンパンやワインの提供もありましたが、残念ながら最近ではコーヒー程度になってきているようです。

さて、今回は私に国際名誉会員にとの話が舞い込んできましたので、国際名誉会員についても少し紹介させていただきます。学会の方に問い合わせましたところ、国際名誉会員は90名ほどで、日本人では小林晶先生、山室隆夫先生、小野村敏信先生、田中千晶先生、金子和夫先生と私の6名とのことでした。特に、一昨年に田中先生、昨年に金子先生と最近続いて日本人が推薦され、フランス人の日本人に対する評価が高まっているのではと思いました。

SOFCOTはフランスの学会ですが、イタリア、スイス、ポルトガル、チェコなどの近隣諸国やカナダなどからも一般演題の発表もありますので、是非先生方も参加されてはいかがでしょうか？演題の締め切りは3月初旬頃です。ただし、抄録がフランス語のみというのが少しネックになりますが。



●今回の学会のロゴ



●会場風景



●器械展示場



●国際名誉会員授賞式。会長のMerloz先生からメダルをいただきました。

レジオン・ドヌール勲章を受章して

日仏整形外科学会会長・福岡日仏協会会長 小林 晶

はじめに

この度フランス政府より「レジオン・ドヌール勲章」(L'Ordre de la Légion d'Honneur)を受賞する榮譽に浴した。甚だ光栄なことで、半世紀以上に亘ってフランスとの交流に微力を尽くしたのが評価されたと推測している。私事ながら晩年になった現在、生涯のマイル・ストーンの一つとして考えている。

本稿はあまり参考になりにくい特異な外国交流経験で、いきおいフランス学自伝となる可能性が大きい。しかし、これが若い医師の海外留学への関心、あるいは好奇心を抱く契機として参考になれ望外の幸いである。

フランスへの関心の芽生え

私どもの年代は物心のついた頃から青春期に至るまで、常に戦乱の中にあり、外国の雰囲気など先人の遺したものでしか、垣間見ることができなかった。

私は文字や外国語に対して子供時代から関心を持っていた。例えば、小学生になってからも、旧国鉄の駅名が平仮名の下にローマ字で書いてあるのを見て、通過してゆく駅毎に中学生であった従兄弟に、読み方を聞いていたのを記憶している。旧制中学校では1年間だけは英語の授業はあったが、以後は戦時中の敵性語として授業は禁止となったし、工場への労働動員で学校とは縁がなくなった。しかし、紙質の悪い辞書で英文を読むことは続けていた。これは自慢ではなく、今で言えばゲーム感覚であった。

旧制高校には戦後間もなく入学したが、ここでは第1外国語がドイツ語で1週間に13時間の授業があった。旧制高校というのは外国語の時間とリベラル・アーツ論議が際立って多かった学校で、解ろうが解るまいがドイツ語は文法と読本が並行して進み、辞書をひくのが追っつかなくても、教授はお構いなく試験で篩い落とす有様であった。しかも、これに第2外国語の英語

が6時間もあるのだから、物理的に考えても頭脳が外国語で埋め尽くされることにならざるを得ない。

しかし、このお蔭と言っておこがましいが、乾いた砂に水が浸み込むように16歳頃の頭脳に吸収されたのか、80歳を越した今でもドイツ語を聴くと、昔が蘇ってくるのが不思議である。余談になるがこの経験から幼少時に、特に音として外国語を叩き込むのは大賛成である。

旧制高校を受験するとき文科に行きたかった。しかし、折から落ちぶれた我が国の有様に、父が何か技術を身に付け暮らすことを息子に奨めたのも、当時としては自然のことであつたらう。理科乙類(ドイツ語が第1外国語のクラス名)を選んだのも、消去法であった。工学部・理学部に向かう理科甲類に入っても、数字、物理に弱い私には苦痛でしかない。あとは医学部と農学部を前提とする理科乙類のみが対象となり、私にとっては医学部しか選択の余地はなかった。こう書くと今の受験生に響感を買うかもしれない。

フランス語との戯れ

私の嗜好は青春期を迎え急速にフランス語に向かった。それは何を隠そうフランス映画に取り憑かれたのである。

楽しむ対象が少なかった戦前から終戦直後に学生生活を過ごした年代の人なら、多かれ少なかれ当時再公開されたフランス映画の魅力に取り憑かれたのではないだろうか。「巴里の屋根の下」、「商船テナシティ」、「望郷」、「大いなる幻影」、「女だけの都」、「ミモザ館」、「舞踏会の手帖」・・・モノクロで織りなす傑作の名を思い出し、口にするだけでもぞくぞくする。いわんやメロディを奏するようなフランス語を聴くと、心は楽園に飛躍しているのである。当時はもちろんレコーダー類は無く、流麗なフランス語のシナリオを追って聴く以外に、生の音声の印象を残す方法はなかつ

た。幸いにある出版社が外国映画の原語のシナリオを出版していたので、洩れなく買ってきて最初は興味の中心をストーリーに置いて楽しみ、2回目からは最前席でエクランの明るさでシナリオを追うのである。これは実に効果的であった。

そして、「にんじん」や「禁じられた遊び」で見るとような石の家に住みたいという念願が日増しに大きくなった。

医学部に入っても、同好の士を募ってフランス語同好会を創り、仏文科の教師から課外の授業を受けた。マニアばかりが集まっているから一同熱心に取り組み、櫛の歯が欠けて落ちて行く語学教室特有の現象は、幸いなかったのが嬉しかった。

医学部を卒業し、インターンはフランス語が本格的に学べる東京を選び、ここでも精を出した。まだ戦災の跡地があちこち残っていた時代であった。アテネ・フランセで練達の学習者に混じって、時間の許す限り生のフランス語の洗礼を浴びた。

インターンから帰福すると(1957年、昭和32年)、市内に福岡日仏協会という日仏親睦団体が結成されたので、すぐ入会して医学徒以外の人々と交わり、益々フランス学の熱は高まるばかりであった。現在、私がこの協会の会長を仰せつかっているのを考えると、過去半世紀以上になる本格的な耽溺振りは、はたから見ると異様なものであつたらう。

協会は医学以外の人達の話が聞けてきわめて興味をそそる会合であった。いわゆる「巴里祭」—これは映画のタイトルに影響を受けた和製の名称である。実際は「フランス共和国革命記念日祝賀会」である—の催しもシャンソンが流れてダンスに興じ、優雅に時間を忘れる夕べであった。現在も毎月の卓話を聴く例会や年に2期のフランス語講習会を続けている。

当時の協会々長は九大文学部仏文学科の進藤誠一教授であった。進藤先生は岩波文庫の「戯れに恋はすまじ」(アルフレッド・ド・ミュッセ著)の翻訳などで知

られた、実に洒脱なフランス的雰囲気を持った紳士であった。その上、迷わずに整形外科教室に入局したことは、神中正一教授の溢れるほどのフランス語文献が記述された教科書を読み、講義に洒脱さがあつた天児民和教授を師として学べて幸運であった。進藤先生は三高、京大の出身であったから、天児先生とは同じ関西人としての親しみがあつたようだ。

私は何としても渡仏することを考えていたが、たまたま両教授に相談すると、外貨制限があつて自由に海外渡航ができない我が国の現状では、フランス政府給費留学生に選ばれる以外にないという結論になった。我が国の外貨不足は終戦から1960年代までは深刻で、自由に外国には渡航できず、今からは想像できないほどの貧乏鎖国であった。

音に聞く難関の給費留学生試験では、関東・関西の日仏学館での準備過程を経ている受験生を相手にしなければならない。折よく日仏協会にロミエ夫人というフランス人がいたので、早速個人授業を依頼した。この時、一緒に学んだ一人の外科の学友がいて、彼の天才的な語学才能は数カ国語を解し、私のような者が太刀打ちできるレベルを遥かに凌駕していた。彼が私の訓練のライバルとして拍車をかけたことは、今でも感謝している。ロミエ夫人は英語はおろか日本語も話さず、フランス語のみで我々二人を教えることも幸いした。

我々の医局時代も今でいう研修義務があり(出張と称した)転々としたが、各地でカトリック教会があればこれを訪ね、フランス語を話す神父が幸いになれば、そこで会話訓練を続けた。今でこそ言えるが、神父のような聖人君子的な宗教色の強い人に外国語を学ぶのは、あまり勧められない。というのは失礼ながら、カトリック神父は話題が限られ、巷の俗語・口語はほとんど話さないし、実用的ではないからである。

フランス語は音声言語であつて、発音のための構成変化が多い。換言すれば、そのための規則がある。例えばリエゾン、エリジョン、アンシェヌマン、二重

母音や母音同志の衝突を避けるため意味のない字を加えるなど・・・読むだけではなく、発音できなければ、またしなれば言葉を成さない。そこに美しさ、流麗、甘美がある。話していると陶酔すら感じるから不思議である。そこに魅力もあると思っている。

いわゆる語学校での集团的授業は、会話という観点からは難点がある。各人のレベルが違い過ぎると最悪である。どうしても教師はレベルを低い方に合わせざるを得ない。日本語を話さないnativeの個人授業に越したことはない。

さて、このようにして1960年(昭和35年)の秋に実施された給費留学生試験に挑むことになった。東京日仏会館の掲示板には選考の要項が発表されていた。読むと初日は仏文和訳(version)、2日目日文和訳(thème)、3日目書取り(dictée)、4日目医学論文解説(日仏2カ国語の筆答・口答)、5日目口頭試問(フランス人試験委員による)6日目身体検査とあるではないか！これには驚き、勝手が違うと一人で呟いた。インターン時代の同級生の家に泊っていたので、帰宅して彼から「当たって砕ける！」と激励、慰撫されたことを鮮明に記憶している。

試験に合格して天児教授に報告したとき、「良かったなあ！」と大きな声で肩を叩かれた。秋霜烈日の厳しい師匠であったが、師事して褒められたのは、このときだけだったと記憶する。欣喜雀躍したことは、言うまでもない。

フランス留学時代

留学先としてリヨン(Lyon)を選んだ。パリは住宅難、物価高があり、純粋のフランスの雰囲気味わえないので、地方での研修が勧められる、という大使館の公式見解が示されていた。フランスはインドシナ戦争に続いて。アルジェリア戦争の真最中であった。

もちろんリヨンがローマ時代からの古都で、パリに次ぐ伝統的なフランスの都市であり、気障っぽく言えば、医学部はフランソワ・ラブレ、クロード・ベルナル、レオポルド・オリエ、アレキシス・カレル、ルネ・ルリッシュ、ジュール・フロマンなどを輩出した名門である

ことは、渡仏以前に熟知していた。また、若い時代に読み耽った永井荷風の「ふらんす物語」の舞台であることは「石の家に住む」動機に一致していたのである。

何よりもリヨン生まれのニコラ・アンドリが1741年「Orthopédie」を出版し、「整形外科学」という言葉の発祥の地でもあった。このことも神中正一先生の随筆ですでに読んでいたので、まったく未知の地ではなかった。

1961年秋、リヨン・ペラーシュ駅に夜行列車で到着した時の感激は、荷風になぞえれば「・・・いよいよリヨンの市街へ入ったのである。自分は慌てて落ちている帽子をかぶり、衣服の塵を払って車を降りた。駐車場の時計は夜の三時半、夏の空は星消え月落ちて、もう白々と明けかかるのであった・・・」。

大学が世話をしてくれた下宿は、古い建物の2階の一室であった。近くにジャン・アラン・サートル君という私と同年代の青年がいて直ぐ親しくなり、帰国後の後年まで毎年バカンスに福岡の我が家にやってくるほどの縁ができた。彼の母親はコンセルパトワールのグラン・プリを獲得したピアニストで、ドビュッシーの「月の光」を無聊のとき演奏してくれる優雅な女性であった。リヨン名物のクネルの心づくしの料理を度々食べさせてくれた。

肝心の医学について少し語ろう。勤務したエドゥアル・エリオ病院(Hôpital Edouard-Herriot)は1,800床

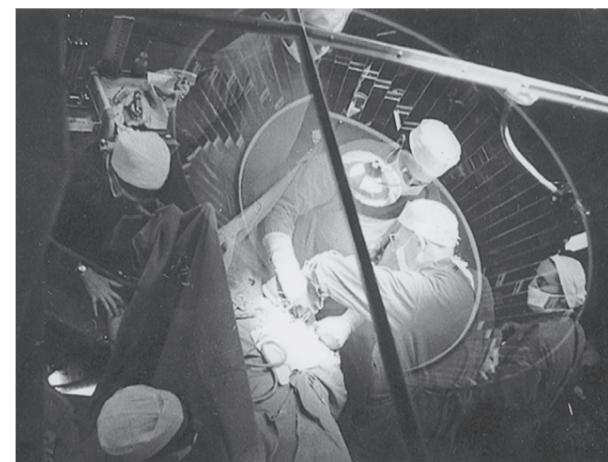


●写真1 Hôpital Edouard-Herriot (リヨン、1960年代)

を持つリヨン大学医学部附属の市立病院である(写真1)。各専門科が独立した建物に入り地下道で連結されている。1933年に建築された整形外傷外科病棟は、すでに屋上にヘリポートを備え、折からのアルジェリア戦争の戦傷者を多数搬送していた。お蔭で外傷患者の種々の様相や、普段ではお目にかかれない貴重な症例を見ることができた。主任のクレールセル(Jean Creyssel)教授は骨盤周辺骨折治療を得意としていただけに、一週間に数例の骨盤輪の外傷手術に事欠かなかった(写真2,3)。給費留学生は教授の手術にはかならず助手をつとめる義務があり、レポートも書かされる。

極めて多忙な日々であったが、最大の楽しみは病院食堂の昼食であった。ナプキンは名前のイニシャルを刺繍した専属のものがすでに用意され、食卓には5種類の飲み物と2種類のコース・メニューがあった。因みにこの時代のフランスの主な食事は昼であり、たっぷり2時間が当てられていた。市内の車の混雑は昼食で自宅を往復する人がかなりあり、1日に4回のラッシュ・アワーがあった。食事の内容はグルメの地であるだけに素晴らしいもので、我が国からみれば垂涎の的であった。

一人身ではあったし、休日はジャンとよく近郊の旅をした。今は世界遺産に登録されている旧市街、フルヴィエールの丘、古代ローマ劇場の跡、ヨーロッパ随一の絹の生産交易地であったリヨンが誇る織物美術館、



●写真2 手術中のジャン・クレールセル教授(右から2人目、1961年)

クロード・ベルナル博物館、オテル・ディウ、果てはサン・テチエンヌ、ブルゴーニュ、ジュネーブ、グルノーブル、地中海沿岸のプロヴァンス・・・じっとしている時間はなかった。

当時のフランスはすでに車社会であったし、高速道路もかなり整備されていたので、フランス周遊ドライブも印象に残っている。中世の面影を遺す田舎の村の風景は、最も私が熱望していただけに、感慨深い想いの連続であった。なだらかな丘を登ると教会の尖塔が見え始め、村の中心の泉や小川の洗濯場を目の当たりにしたときの感慨は筆舌に尽くしがたい。

今でこそリヨンはグルメの街として良く知られるようになって、日本人も割合訪れるようになったが、当時の居住者は4人だけであった。半年間は日本語はおろか英語を使う機会も無く、もっぱらフランス語で暮らした。しかし、市民の話すアルゴ(俗語)には暫くの間は悩まされた。公式な単語に各々のアルゴが存在する有様で、こればかりは日本では訓練しようがないので、それこそ話にならない。

種々の事情が絡み、1年そこそこで帰国せざるを得なかったときの尽きせぬ名残りは、名状しがたい感情として残った。同時に、時が来ればまた渡仏して暮らそうという、まさに「うましフランス」(la douce France)の誘惑であった。

待望の第二回目の留学の機会は1975年にやってきた。



●写真3 整形外傷外科病棟のアンテルヌ交替記念(前列右端ジャン・クレールセル教授、その左ジョルジュ・ドゥ・ムールグ教授、1961.12.11.)

これは我儘を許してくれた教室と、再び給費を支給して厚遇してもらったフランス政府に由るところが大きい。再びリオンを滞在地としたことは言うまでもない。ジャンの家族と再会し、昔のままの生活が始まった。

今回は前回と違って、少しは医学に戻らないと留守中奮闘している教室の人々に申し訳ないし、幸い世界的な膝関節外科の泰斗であったアルベール・トリヤ (Albert Trillat) 教授(写真4)に師事することになったからである。

トリヤ教授のもとにはアンリ・ドゥジュール (Henri Dejour、私と同年輩で当時は助教授格であった。フランスの医師、大学の肩書きは我が国とは制度・呼称が全く異なるので、単純に翻訳できない) がいた。両者とも大変教育に厳しく、観察眼の鋭さは流石であった。リオンは世界的な膝関節外科の中心の一つであり、各国からの留学生、見学生が絶え間なくやって来た。

教授の外来診察と手術には、前回と同様かならずアシスタントを勤めねばならなかった。トリヤ教授の外来診察はきわめてユニークで、病歴を丹念に聴いたあとで、私の方を振り返って「診断はどうかね?」と所見を取る前から質問がある。病歴の中での些細な事象に思考を巡らし、すでに頭の中では病像が固まりつつ



●写真4 アルベール・トリヤ教授(第55回日本整形外科学会学術講演のため来日、福岡市、1982.3.29.)

あるのだ。診察して所見をやおら整理したのち、再び質問の矢が飛んでくる。X線写真撮影や関節造影がなされる前である。無言に過ぎたり、あらぬ方向の診断名を述べると機嫌は途端に悪くなる。「Imbécile!(頓馬な奴)」、「Tu seras guillotiné!(ギロチンにかけろ)」と怒声が飛び、苦笑いが周辺から起こる。病棟回診時でも質問に無言のままが最も蔑視される。間違っても何か口にすべきことを学ぶ。何しろ小学校時代から討論慣れして、作文も同じ形容詞を繰り返さないのがお国柄なのである。

膝関節の手術は工場作業のように、次から次に麻酔が前以てかけられ、術者は部屋を移りながら進めて行く。スポーツ外傷と交通事故が最も多かった。患者はヨーロッパはおろか中近東、アフリカからもやって来た。年間半月板切除術、靭帯再建術は各々400例以上、お得意のElmslie-Trillat法が1週間に2~3例の頻度で行われた。症例の多種多彩なことには、めくるめく思いであった。

ドゥジュール教授(写真5)はトリヤ教授の良き後継者となった。現今フランスで活躍している次世代の膝関節外科の専門家の多くは、*école lyonnaise* (リオン学派)の出身である。

両教授とも日整会やリウマチ関節外科学会に招待講演をお願いし、フランス滞在中の温かい接遇に報いることができた。

外国からの留学生が多数いて、ラテン系の諸国とア



●写真5 アンリ・ドゥジュール教授(停年退官記念講演、リオンにて、1997.4.5.)

ラブの留学生の多さが目立った。エジプトのゲネイディ氏(カイロ陸軍病院部長)と仲良くなり、カイロの同氏宅に招待され、アラブの世界を垣間見たのも留学の恩恵と言える。

フランスとの交流

帰国してからもフランスとの交流の密度と頻度は益々濃くなった。

伝統のある福岡日仏協会とは別に、フランス外務省は福岡市に九州日仏学館の創設を希望してきた。日仏学館はすでに東京と京都には存在していたが、福岡の地が第三の候補として選ばれたのは光栄なことで、依頼に応じて協力を申し出た。設置場所は難航したが、主要道路に面した格好のビルの空室を見つけ、1975年発足に漕ぎ着けた。このとき保証人となり、名称は現在「アンスティチュ・フランセ・九州」(Institut Français-Kyushu)と変わり、益々フランス語および文化の交流拠点として大きな存在となっている。このようなフランス語および文化を組織的に学べる機関が、福岡市に存在するのを見るとき今昔の感がある。

1982年(昭和57年)福岡市は姉妹都市の一つとしてボルドー市を選んだ。福岡日仏協会に市の姉妹都市委員長就任の要請があり、これは経済交流の性格が強かったから逡巡したが、交流には大切な仕事と考え止むを得ず承諾した。したがって委員会の開催日は手術日であってもスケジュールを調整しながら、出席するような事態も発生した。毎年1回ボルドー市で開催される国際見本市には、使節団の一員として市長とともに渡仏する破目になった。1995年福岡でユニバーシアード大会を開催するときには、フランスの大学の運動部、グラウンド、練習などを視察したこともあった。大会参加のフランス選手団のために、特別に企画した歓迎会を市民とともに開催し、盆踊り大会で一緒に一夜を過ごしたこともあった。

旅行者や在福フランス人の疾病の治療、相談が多くなったことも親善交流の一つであった。大学を去る少し前、レンヌ(フランス西北部ブルターニュ県)から来福していた若いフランス人女性が膝関節の交通外傷で

教室に入院したことがあった。これは脛骨プラトーの骨折に後十字靭帯断裂を合併しているかなり重篤な外傷であった。治療後、彼女がフランスに帰国して15年後、突然便りをもらい順調に経過しているとの消息を知った。2011年私がプレスト(ブルターニュ半島にある港湾都市)の病院を訪問したついでに、レンヌに寄り彼女の一家を訪問する機会があり、手術時の四方山話に華が咲いた。

大学を去ってからも、私たちの病院にはフランス人患者は多数やってきて、大使館員に連れられて東京から来院した患者や在福フランス人もいる。その中の一人の女性患者にはフランス語のレベル維持のため、私の方が教わって会話技法や論文作成法をリニューアルするのに助かっている。

1981年にパリで出版された“Nouveau Larousse Médical”(新ラルウス医学辞典)を翻訳出版しようとの計画があり、私もその一員として加わるよう出版社から依頼があった。我が国には明治以来の英独語偏重のせいで、なかなか良い仏和医学辞典が無かったこともあり、私にとっても非常に有意義なことであった。1985年に出版できたのは、後述する「仏日・日仏整形外科学用語集」の出版に当たって大きな参考になった。

1987年には日仏整形外科学会 (Société Franco-Japonaise d'Orthopédie, SOFJO)を七川欽次先生(滋賀大名誉教授)や菅野卓郎先生(市立川崎病院院長)と相談して発足した。以後、毎年学会を開催し2012年までに15回を重ねた。

これとは別に1990年にはフランス側の提唱で日仏整形外科合同会議 (Association France-Japon d'Orthopédie, AFJO)が設立された。これは開催地を日仏交互にして、2年毎に開催されている。フランス整形災害外科学会 (Société Française de Chirurgie Orthopédique et Traumatologique, SOFCOT)はAFJOの運営を全面的に後援してくれ、学会広告、交換留学制度について広報活動をしてもらっている。2013年に第12回目を開催した。

同じ1990年には交換研修医制度を設けて、すでに我が国から70名以上の若い整形外科医が渡仏し、多くの実り多い成果を挙げている。帰国後、枢機の地位を得

られ、教職にも手腕を振るっておられる姿を見るとき感慨が深い。フランス側からも40名を越す研修生が来日している。この機会に受け入れて頂いた我が国の施設に感謝する次第である。

特筆すべきことは、SOFJOTは毎年学会への招待国を選び、その最初の試みとして2011年我々のSOFJOを招待してくれたことである。30名近い我が国の会員がパリに出かけ参加した(写真6)。学会当日はこのセッションのために1室が用意され、演題発表と活発な討論が行われた。フランス側から絶大な賛辞を受けて面目を施した。こうしたこともあり、是非日本整形外科学会からも後援をお願いしたいと思っている。これはSOFJOTの好意に報いることにもなると信じている。

我々の学会が2013年5月「仏日・日仏整形外科学用語集」を出版したことも、相互理解に大きな役目を果たしてくれると考えている。これは1989年森崎直木先生(東京女子医大名誉教授)が編集された「日仏整形外科学用語集」を基礎にして、大幅に新語の追加、改訂を行い、時代に合うように一新したものである。編纂には3年間を要したが、今回は日本語からも検索できるようにしているので、はるかに利便性が高いと自負している。大いに利用してもらおうと有難い。

話題を換えて医学史のことについて触れておきたい。恩師天児民和教授が亡くなられてから、それまで積み上げてこられた医学史研究の途絶を私は憂慮した。先

生の業績は知る人ぞ知るで、論文、エッセーは汗牛充棟である。蒲原宏先生(新潟市)、川島真人先生(中津市)のような、医史学会でも有数の碩学を門下に輩出したことを思えば、その影響力の大きさが解るであろう。

私は旧制中学校の西洋史の授業で、教師のうまい講義調のナポレオンやジャンヌ・ダルクの談義を貪るように聴き、その戦記・伝記を読んでいたし、満更歴史は嫌いではなかった。後年、これら英雄や勝利の戦場の名を冠した道路やメトロの駅に遭遇したときの感慨は、中学生時代の授業や書物に懐かしい想いを馳せたものである。

そこで日本医史学会へ入会し、すぐの演題を発表し始めた。1996年(平成8年)のことであった。現在までフランスに関係する13題の発表(表1)を数年続け、その後我が国の整形外科関係や九大の歴史的事項を交えての報告を毎年欠かすことなく行ってきた。(紙数の関係で各項の詳述はできないが、いずれも小論を発表しているので参照して戴くと幸いである)

リヨンでの友人ルイ・フィッシャー(Louis Fischer)教授が整形外科医でフランス有数の医史学者であったのが幸いし、フランス医史学会にも入会して、逆に我が国の整形外科史を話す機会を得た。リヨンの整形外科初代教授で多くの世界的業績を遺したレオポルド・オリエの没後百年記念日が2000年生地レ・ヴァン(Les Vans、南フランスの小村)で開催されたが、フィッシャー教授の招待で参加したのも思い出の一つである。



●写真6 第85回SOFJOT学術総会の招待国として参加記念(前列左から3番目ジャック・カトン教授、左端アラン・デュランド教授、パリにて、2010.11.11.)

| 日本医史学会学術総会講演(フランス関係) | |
|---|---|
| 1. リヨンにおける医学小史(一) - クロード・ベルナル博物館 第98回(福岡) 1997.9.11. | 7. 孤高の外科医ギヨーム・デュピュイトラン男爵(1777-1835) 第106回(東京) 2004.6.28. |
| 2. 同上(二) - オテル・ディウとシャリテ 第99回(函館) 1998.6.17. | 8. 関東大震災における仏蘭西寄贈病院 第107回(中津) 2005.5.13. |
| 3. 膝関節に名前を残す二人のフランス人 Gerdy と Segond 第101回(京都) 2000.10.15. | 9. 「オルトペディ」の造語者ニコラ・アンドリ(1658-1742)(その一) 第108回(大阪) 2007.4.7. |
| 4. 足部に名前を残す二人のフランス人 - Chopart と Lisfranc 第102回(仙台) 2001.9.30. | 10. 同上(その二) 第109回(佐倉) 2008.6.22. |
| 5. 画家トクレーズ・ロートレック(1864-1901)の疾患について 第103回(新潟) 2002.9.28. | 11. 近代整形外科の先駆者、レオポルド・オリエ(1830-1900) 第110回(佐賀) 2009.6.7. |
| 6. 高松康寛(1836-1916)とフランス 第105回(横浜) 2004.5.16. | 12. ジャン・マルタン・シャルコーと神経障害性関節症 第112回(東京) 2011.6.12. |

●表1 日本医史学会学術総会におけるフランス関係講演リスト(小林)

因みにオリエ教授の名は股関節切開法や関節切除術で、神中先生の著書に多くの記載がある。

2003年にはギヨーム・デュピュイトランの生地(ピエール・ビュフィエール村、ヴィエンヌ県にあり、中西部リモージュの近郊)を蒲原先生と訪れた。生家はもちろん、道路、泉、ホテルなど全村至るところにデュピュイトランの冠名があり、村役場の庁舎内も彼の肖像、胸像、文書などで埋められている。人物としてはあまり芳しくない批評ばかりであるが、郷里ともなるとデュピュイトラン様々であった。リモージュ大学もデュピュイトラン大学の別名がある。彼の人生は波乱万丈であり、パリのペール・ラシェーズ墓地の周囲を睥睨するような大きな墓石をみれば、彼の医学的業績の偉大さが偲ばれる。

筑後小郡出身(久留米藩)の高松凌雲については、幕末にパリのオテル・ディウでフランス医学を学んだ歴史と、帰国後慈善事業に尽くした業績を幾つか紹介してきた。我が国では日仏医史学上のエポック・メイキングな意義としても度々述べた。今も小郡市での凌雲顕彰会に属して行事に参加している。

2011年ボルドーで開催されたAFJOでは、折からの東北大震災に触れ、関東大震災でのフランスからの寄贈病院の歴史の講演をさせてもらった。フランスは日本救助キャンペーンを行い、野戦病院一式と救急車両を2隻の船で送ってきたのである。これらの日仏の歴史的な交流を現在も続けている。

レジオン・ドヌール勲章を受章して

2013年6月26日付けのクリスチャン・マセ駐日フランス大使から公式の外交文書が来て、フランス共和国大統領が私にレジオン・ドヌール勲章授与することを知った。

実は2012年夏、在福フランス人の間で、私をレジオン・ドヌール勲章候補者として推薦の気運があることは仄聞していた。書類を揃えるよう促され、慌てて山積された書類を仏文で整理し提出したが、どうせ平凡な市井人に夢のような栄誉は無理であろうと放置していた。ところが突然のこの大使からの親書は私を驚愕させた。

これが現実となったのは、福岡市で恒例行事となっている「フランス共和国革命記念日祝賀会」が2013年7月10日に開催され、列席した在京都フランス総領事フィリップ・ジャンヴィエ-カミヤマ氏が多数の参会者の前で、この事実を公表したときであった。

レジオン・ドヌール勲章は1802年ナポレオンが制定したが、長い歴史を経て現在ではフランス共和国に尽くした人に与える最高の栄誉とされている。私事を重ねて恐縮だが、私は1985年すでにパルム・アカデミック勲章(L'Ordre des Palmes Académiques)を授与されていて、これは教育・文化領域におけるフランス共和国への貢献に与えられたものであった。

最後に、去る2012年9月22日東京で開催された第15回SOFJOでの作家“なだいなだ”氏の特別招待講演の感銘深い一節を紹介して拙文の締めくくりとしたい；“言葉は道具にしか過ぎませんが、世界を開くという道具は小さくて大きいのです。それが新しい世界に導いてくれるのです。私にとって宝の山を開く鍵になりました。80歳を過ぎてそう確信するようになったのです。

フランス医学が先ず実用知識(プラティック)を大切にするという精神に触れることができました。自分の考えを哲学と考えるようになりました。

治らない病気に何をなすべきか、何が可能なのか、何を知り得るのか、毎日考えるようになりました。これがカントの生涯の命題であったことに気づかせてくれたのはフランスです。そこから理性でなく常識だ、という考えに至りました。”

終に

二度に亘る栄誉は今日まで育てて戴いたSOFJO、関連諸団体および会員の皆様のご支持によるものと、心から感謝している次第である。これから先の残された人生を、さらに両国の親善、交流に尽くしたいと念願している。

(本稿は九大整形外科同窓会誌に発表した拙文「日仏交流60年の回顧」(2013年11月)を基礎にしている。許可を得て改めて編集、掲載していることをお断りする)

スローな生活、実のある生き方

日仏整形外科学会 名誉会長・行岡病院 七 川 欽 次

この前の続きのようなものを書いてほしいという大橋先生からの御依頼があり、どんなものでもよろしいということであった。それならこれからフランスへ留学しようとする人達の為(タメ)になることは書かせんと前回お断りしてあるので、好きなことでよいというお墨付きをもらったことになり、安心してお引き受けした。ところが不思議に同じ頃に又病気になり(実は忘年会での飲み過ぎ)またもやお断りしようかと考えたが、原稿の締め切りまでによくなっているかも知れず、何しろ為(タメ)にならなくてもよいという誘いがあるので、今も入院中の身ながら、日頃お世話になっている大橋先生との約束は守りたく、書かせて戴くことにした。少し間の抜けたところがあると思うが療養中ということでご勘弁ください。

フランス人はゆったりとスローな生き方をしているように見え、日本では“金があるのに貧相な日本人、金がないのに楽しそうなフランス人”という(大体そういう意味のタイトルの)文庫本まで出ている。実際は少しもスローでなく、日本より手きびしいがそのように見える、何故だろうか?

この前お書きしたように、私がパリで最初に訪れたのは16区、オートイユ(競馬の名所)の地下鉄の出入口の近くにある下宿屋で、外壁のないエレベーター(あの頃はこれも珍しかった)6階?のアパルトマンまで上ると、Mme. Brotが出迎えてくれた。病気にならなければ先ずMme. Brotのことから書き始めたかったが次回にゆずることにする。何れにしても旅行鞆2個ともども応接室の電話機の横に座らされ、部屋の案内はそっちのけで、あなたはこれからどうするの?という質問である。十分日本から依頼あったと思うがそんなこと一言も言わない。それでProf Costの教室に入って勉強したいのだという、それなら先ずCost教授に電話しなくてはということで二又に分かれている片方の受話器を私に渡してくれる。神妙に待っているとCost教授を呼び出し(これには一寸びっくり)、ここに

あなたの教室に入りたいという日本の若者がきている(後は何をいっているのかさっぱりわからない)とやや遠慮勝ちであったがさかんにやりとりした拳句(私には一言もしゃべらさず)、何日何時頃どちらへ行けばよいのかをとりきめてくれる(途中Cost教授がDr. Shichikawaはいないの?という質問が一寸だけきこえてわかったくらい)。こうしてCost教授との面会予定日、場所がきまる。予定がきまってやっと部屋の案内をしてくれた。ここはアメリカのMission Schoolの生徒の行儀見習いのための国外付属施設の一つで、毎年生徒を2~3名あずかるが、男ははじめてとのこと。その頃もう一人スウェーデンの娘さんがどういう資格かしらないが居た。この娘さんは日本人のように私の前を横切る時はすみませんと挨拶するし、Mme. Brotの炊事の手伝いもしていたが、アメリカ人は私が言ってもやらぬニヤニヤしているだけ。私の前を威風堂々と通り過ぎる。ともあれやっとパリでの住居がきまり、さらに次の訪問先、予定日までもきまった。少しもスローではない。

2~3日してCost教授に会いに行く。肩の痛みの患者の診察中であつたが、私が入っていくと一旦手を休め、私についてこいという。患者の方はたまたま呼ばれ、整形外科ではどういう風に診るのかとCost教授にきかれていたPostel講師(Chef de Clinique, 後の教授)が居て、後はよろしくといわれていた。どこへ行くのかと思うと向いの病棟にあるMerle d'Aubigné(メルルドヴィネ)教授の部屋であつた。同教授は今や世界的に、またヨーロッパを代表する存在であり、アングロサクソン側のお気に入りというよりラテンヨーロッパをまとめるのに利用されていたと思われる。丁度入口前で、私を引き合わせ、これからやってくるから宜しくということすんだ。電話でどうの、紹介状がどうの、面会日がどうのということは一切ない。Merle d'Aubigné教授の方も私が政府企画の初めての留学生(前に書いた)で仏人同様厚生省からサラリーの出るリウマチ学教室

のアンテルヌ相当(Médecin résidant éinterne 外国人住み込み医師、アメリカでいえばレジデント)なので、愛想の一つもと思ったのか、ここは何でもあなたの好きなようにやれるところだとか何とかいってくれた。短時間ですんだが効果と印象は抜群だろう。Cost教授の診察が終ると助教授のProf. Delbarre (Cost教授の後継者)が近所のレストランへ招待してくれた。その時出されたカマンベールの強烈な香りに目を向いて、一口も食べられなかった。元来チーズもあまりたべたことがない。それを見てDelbarre教授はニヤニヤしている。

これで私の入局歓迎は終了。物や機械よりも人間関係が優先しているように見え、さぞかしややくして時間がかかるだろうと思われるが上に書いたように極

めて早くすむので結局はスローでも何でも無い。

私はこのようにして教室に受け入れられ、一年半勉強することになったが後は本人の能力次第。しかし私にはその上、不眠症(日本でなったことはない)とフランス語という責苦が待ちかまえていて、気を休めるところがない。一時はやっぱり敗北かと思ったが、うまく立直ることができたのは、(1)フランス料理のうまさ、(2)下宿のMme. Brot教室の環境の良さのせい、大げさにいうとフランス的intelligence*のせいではなかったか、と今はしみじみと感謝するばかりである。

*私の造語かもしれないが、そうでない気もする。次回書かせて戴く。



●私が唯一泊ったことのあるボルドーのシャトーラグランジュ。しかし泊っても昔の作りなので快適ではない。長逗留でないとい味がでないだろう。

日本側・フランス側役員を紹介します

日本側役員

名誉会長 七川 歆次
 会長 小林 晶
 副会長 瀬本 喜啓
 書記長 大橋 弘嗣
 書記 青木 清
 藤原 憲太
 幹事 金子 和夫
 安永 裕司
 久保 俊一
 名誉会員 小野村敏信
 坂巻 豊教
 日本側公式連絡員 ジラン敬子

フランス側役員

President Philippe Hemigou (Paris)
 Secrétaire General Philippe Merloz (Grenoble)
 Trésorier Philippe Wicart (Paris)
 Membre de Bureau Philippe Livermeaux (Strasbourg)
 Alain Durandeu (Bordeaux)
 Jean Pierre Courpied (Paris)
 Olivier Guyen (Lyon)
 Jacques Caton (Lyon)

日仏整形外科学合同会議 (AFJO) 開催一覧

| 会期 | 開催地 | 議長 |
|---------------------|--------|----------------------|
| 第1回 1990年11月12日 | パリ | Régie C. Michel |
| 第2回 1992年10月4日 | 京都 | 七川 歆次 |
| 第3回 1994年11月7日 | パリ | Charles Picault |
| 第4回 1996年4月13～14日 | 東京 | 菅野 卓郎 |
| 第5回 1998年9月17～19日 | リヨン | Jean Pierre Courpied |
| 第6回 2001年5月11～12日 | 大阪 | 小林 晶 |
| 第7回 2003年9月26～27日 | グルノーブル | Philippe Merloz |
| 第8回 2005年5月6～7日 | 京都 | 瀬本 喜啓 |
| 第9回 2007年9月14～15日 | ニース | Jacques Caton |
| 第10回 2009年5月28～30日 | 沖縄 | 大橋 弘嗣 |
| 第11回 2011年6月2～4日 | ボルドー | Arain Durandeu |
| 第12回 2013年5月30～6月1日 | 京都 | 飯田 寛和、田中 千晶 |

日仏整形外科学会 (SOFJO) 開催一覧

| 会期 | 開催地 | 会長 |
|------------------|-----|-------|
| 第1回 1987年11月6日 | 神戸 | 七川 歆次 |
| 第2回 1988年10月29日 | 東京 | 七川 歆次 |
| 第3回 1989年11月11日 | 大阪 | 七川 歆次 |
| 第4回 1991年11月9日 | 大阪 | 七川 歆次 |
| 第5回 1993年10月30日 | 大阪 | 七川 歆次 |
| 第6回 1995年5月10日 | 大阪 | 七川 歆次 |
| 第7回 1997年11月1日 | 大阪 | 七川 歆次 |
| 第8回 1999年10月16日 | 大阪 | 山野 慶樹 |
| 第9回 2000年11月25日 | 横浜 | 坂巻 豊教 |
| 第10回 2002年10月12日 | 弘前 | 原田 征行 |
| 第11回 2004年11月6日 | 神戸 | 小野村敏信 |
| 第12回 2006年10月14日 | 京都 | 久保 俊一 |
| 第13回 2008年9月27日 | 東京 | 金子 和夫 |
| 第14回 2010年9月25日 | 広島 | 安永 裕司 |
| 第15回 2012年9月22日 | 東京 | 飯田 哲 |
| 第16回 2014年9月6日 | 福岡 | 塩田 悦仁 |



あなたも
フランス研修に!

日仏整形外科学会では、フランス整形外科学会（SOFECOT）との間で青年整形外科医の交換研修を行っております。来年度の研修条件、応募条件等は下記のとおりです。詳しくは下記のとおりです。

本交換研修プログラムの趣旨は、フランスとのコネクションを持たない青年医師に留学先を紹介し、渡航費用と滞在費の一部を援助するというものです。したがって、一度フランス留学を経験しておられる先生は応募をご遠慮ください。

募 集 要 項

| | |
|-------------|---|
| 1) 募集人員 | 若干名（平成27年度） |
| 2) 研修条件 | <p>1. 滞在期間は3か月間を原則とする。 この間はヴィザが不要であるが、これを越して滞在する場合の延長に関するすべての手続き（語学学校入学手続きやヴィザ発給のための受け入れ承諾書の依頼等）は自分ですること。 1か月単位であれば複数の施設での研修も可能である。</p> <p>2. フランスでの滞施設は、希望する研修分野等に応じてフランス側の担当委員が最も適当と思われる施設を推薦する。ただし応募者が特定施設を希望するときは申し出ることができる。</p> <p>3. 費用について a) 渡航費用の一部を日仏整形外科学会が援助する。 b) フランス滞在中の滞在費、食費および移動などの費用は原則として自己負担とする。</p> <p>4. 帰国後、仏語（英語でも可）と日本語での報告書の提出ならびに本会の総会での帰朝報告を行う。</p> <p>5. 本年度の研修開始時期は4月以降とする。</p> |
| 3) 応募条件 | <p>1. 応募者は日仏整形外科学会会員であること。 2. 応募者は日本整形外科学会専門医であること。 3. 原則として40才を応募年齢の上限とする。 4. 勤務している病院または施設の責任者の承諾のあるもの。 5. フランス語または英語を話すもの。</p> |
| 4) 応募に必要な書類 | <p>1. 日仏整形外科学会交換研修申請書（TXT, PDFをダウンロード・毎年様式が変わるので、注意する事） 2. 履歴書（大学卒業以降とする） 3. 応募の動機や抱負についての小論文 4. 日仏整形外科学会会員1名の推薦状—推薦者は身元保証人に準ずる者と考えること。 5. 業績目録—主な発表論文5編以内（論文の別刷りは不要） 6. 渡仏承諾書 a) 大学の医局勤務者……………教授の承諾書 b) 病院または施設勤務者……………勤務している病院または施設の責任者の承諾書 (大学の医局人事により出張中の者は、教授の承諾書も要す。) 以上1. 以外の書式は自由であるが、すべてA4サイズに統一し、上記の順にならべて左上をホチキスで綴じること。また、コピーを15部を同封すること。 7. 連絡用住所シール（5枚）……………希望する連絡場所を記入してあて先は～～～先生としてください。</p> |
| 5) 選考方法 | <p>1. 第1次審査は書類選考とする。書類審査の結果は平成26年7月上旬に個別に連絡する。 2. 書類選考に合格したのものには平成26年8月上旬に大阪府済生会中津病院において面接を行う予定である。面接の時間は個別に通知する。 3. 合否は平成26年8月中旬に通知する。 4. 合格者は後日改めて仏文または英文の履歴書等、フランスでの研修に必要な書類が求められる。</p> |
| 6) 申請締め切り | 平成26年6月30日必着 |
| 7) 申し込み先 | <p>日仏整形外科学会事務局 大阪府済生会中津病院整形外科内 〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39 大阪府済生会中津病院整形外科 Tel(06)6372-0333 Fax(06)6372-0339</p> <p style="text-align: right;">日仏整形外科学会 係 大橋 弘嗣</p> |

フランス人研修医
受け入れのお願い

本年度も日仏整形外科学会とフランス整形外科学会（SOFECOT）との間で、青年整形外科医の交換研修を実施いたします。

受け入れ期間は原則として3ヶ月間ですが、1ヶ月でも2ヶ月でも結構ですので、是非会員の先生方のおられる施設で、フランス人整形外科医の研修を受け入れて頂きたくお願い申し上げます。

来日するフランス人医師は、英語を話す事が条件になっております。また日仏間の旅費はSOFECOTが支給し、日本での滞在費（宿泊費・旅費）は、日本側（原則として受け入れ施設が）負担することになっております。受け入れを承諾していただける場合は、受け入れ承諾書に滞在条件等をご記入いただき、係までご送付ください。

日仏整形外科学会 会長 小林 晶
日仏整形外科学会 交換研修係 小林 晶
連絡先：大阪府済生会中津病院整形外科

〒530-0012 大阪市北区芝田2-10-39
TEL 06-6372-0333（お問い合わせは大橋弘嗣まで）
LU7H-00HS@asahi-net.or.jp



第16回日仏整形外科学会

(16ème Réunion de Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)

開催のご案内(第2報)

この度、第16回の日仏整形外科学会(SOFJO, Société Franco-Japonaise d'Orthopédie)を開催させていただくことになりました。1987年からの伝統ある本学会を初めて福岡の地で開催させていただきますことをたいへん光栄に存じます。

私はフランス政府給費留学生として1985年から1年半、Parisの近郊GarchesのRaymond Poincaré病院のPatel教授のもとで学びましたが、その間、ParisのPitié-Salpêtrière病院のRoy-Camille教授、Bichat病院のDuparc教授、LyonのDejour教授、StrasbourgのKempf教授のもとでも短期間研修いたしました。フランスからは多くのことを学ばせていただきましたので、今回は恩返しのつもりで精一杯務めさせていただく所存でおります。

招待講演としてParisのKapandji先生、BrestのDubrana教授、RennesのHuten教授を予定しております。Kapandji先生は生体力学分野で世界的に著名ですが、最近「関節の生理学 全3巻」を改訂され、私が日本語に翻訳いたしました。2012年、新たに「生体力学とは」という本を出版され、現在日本語に翻訳中であります。26年来の知己で現在85歳とご高齢ですが、来年のSOFJOに来福してこの本のサイン会をしていただくことになっております。Dubrana教授は1992年にSOFJOの交換留学生として福岡に来られ、九州大学および福岡整形外科病院で研修されております。Huten教授は私が留学中、Bichat病院へ研修したとき助手としておられ知己であり、Duparc教授のあとを継いでSOFJOTの教育研修会委員長をされております。Dubrana教授には膝、Huten教授には股関節についてご講演していただく予定です。この他にも、ランチョンセミナーを2題計画したいと考えております。整形外科・リハビリテーションの各領域に関する演題を広く募集する予定にしております。会場は福岡の都心にあつて空港からもJRの駅からもたいへんアクセスがよい天神のアクロス福岡で行う予定です。

どうぞ多数の会員の皆様のご参加とご支援を心よりお願い申し上げます。2014年9月、福岡でお待ちしております。

福岡大学医学部リハビリテーション部 教授 塩田悦仁

記

【会 期】 2014年(平成26年)9月6日(土曜日)

【会 場】 アクロス福岡

〒810-0001 福岡市中央区天神一丁目1番1号

Tel. 092-725-9111

<http://www.acros.or.jp/>

【連絡先】 〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目45番1号

福岡大学医学部リハビリテーション部 塩田悦仁

Tel. 092-801-1011 Fax.092-862-8200

E-mail: shiota@fukuoka-u.ac.jp

【演題募集】 2014年(平成26年)3月10日(月曜日)～4月26日(金曜日)正午まで

※その他の詳細につきましては、ホームページwww.2014sofjo.co.jpをご参照ください。



第13回日仏整形外科学合同会議 開催のご案内

(Congrès AFJO 2015)

第13回AFJOはフランスで開催されます。現在のところ、下記のような予定で計画されています。

記

会 長：Prof. Philippe HERNIGOU (Paris)

会 期：2015年6月4日～6日

場 所：Saint-Malo

Saint-Maloは、イギリス海峡に面したフランス北西部ブルターニュ地方の城壁に囲まれた港町です。フランスの高級リゾート地のひとつで、夏には多くの観光客が避暑に訪れる町です。今回はこのSaint-Maloで学会を行い、ユネスコの世界遺産にも登録されているMont Saint-Michelへの学会ツアーが予定されています。日本でも有名なMont Saint-Michelは伝説の小島にそびえる「西洋の驚異」とも呼ばれています。その神秘的で崇高な景観は巡礼者、写真家、芸術家をはじめ散策を楽しむ人々すべてを魅了します。

前回のBordeauxに続いて、魅力的な場所での開催が予定されています。演題応募などが決まりましたらまずホームページにてお知らせします。

今回もたくさんの先生方、ご家族のみなさまの参加をお待ちします。



..... 学会各種ご案内・お知らせ.....

1



「仏日・日仏整形外科学用語集」 発行される

仏日整形外科用語集は森崎直木先生が編集を行われ、1989年に第1版が文光堂から出版されました。その後、1991年に改訂版が出版されましたが、森崎直木先生が亡くなられて以降、改訂されることなく現在に至りました。フランスの整形外科を知るためにはどうしてもフランス語の論文を読む必要がありますので、森崎先生の仏日整形外科用語集は非常に有用な辞書でした。しかし、医学の進歩に用語集も追いついて行く必要があると考え、日仏整形外科学会が中心となってその後の時代に応じて出現した新語を大幅に追加して新しい用語集の編集を行なってまいりました。最終的には単語数は仏日がおおよそ7000語、日仏はおおよそ6200語となりました。編集にあたりましては、日本整形外科学会学術用語委員会から綿密な指導をいただき、また最後には診断と治療社編集部のみなさんの度重なる校正を受けて2013年5月に出版の暁となりました。

購入希望がありましたら事務局までご連絡下さい。診断と治療社のホームページからでも購入していただけます。また、会員の方は学会ホームページからダウンロードもできます。是非ご活用下さい。

2



Welcome to So.F.J.O Homepage
ようこそ日仏整形外科学会 (SOFJO) のホームページへ

日仏整形外科学会のインターネットホームページのアドレスは

<http://www.sofjo.gr.jp/>

です。
是非のぞいてみてください。

- ・新着/NEWS
- ・沿革
- ・活動内容
 - 入会のご案内
- ・役員紹介
- ・共同研究
- ・交換研修
 - 交換研修帰朝報告
- ・会誌INFOS
- ・仏日・日仏整形外科用語集
- ・日仏整形外科協議会 (AFJO)
- ・AFJO (English)
- ・関連リンク集

3

平成24年度会計報告

| 歳入の部 | (単位：円) |
|---------|-----------|
| 一般会員年会費 | 695,000 |
| 会員寄附 | 300,000 |
| 企業寄附 | 910,000 |
| 広告料 | 530,000 |
| 預金利息 | 401 |
| 前年度繰越金 | 3,408,239 |
| 計 | 5,843,640 |

| 歳出の部 | (単位：円) |
|------------------------------|-----------|
| 日本人交換整形外科医奨学金 渡航費+滞在費(一部) | 600,000 |
| フランス人交換整形外科医奨学金 0名 | 0 |
| SOFJO/AFJO開催関係費 | 0 |
| 日仏整形外科学会関連事業(表彰など) | 0 |
| 日仏共同研究、研究助成金 | 0 |
| 森崎日整形外科学用語集編纂事業 | 1,575,000 |
| インターネットホームページ維持管理費 | 338,460 |
| 日仏整形外科学会事務局費 | |
| 通信費 | 78,380 |
| 事務費 | 64,697 |
| アルバイト代 | 256,000 |
| 会議費 | 26,081 |
| 旅費・交通費 | 213,940 |
| 連絡員費用(ジランさん) | 100,000 |
| 印刷費 | 546,000 |
| 雑費 | 4,095 |
| 出金小計 | 3,802,653 |
| 次年度繰越金 | 2,040,987 |
| 計 | 5,843,640 |

平成25年度事業費予算編成

| 歳入の部 | (単位：円) |
|---------|-----------|
| 一般会員年会費 | 1,000,000 |
| 企業寄附金 | 900,000 |
| 広告料 | 800,000 |
| 預金利息 | 300 |
| 前年度繰越金 | 2,040,987 |
| 計 | 4,741,287 |

| 歳出の部 | (単位：円) |
|--|-----------|
| 日本人交換整形外科医奨学金 渡航費+滞在費(一部) 100,000×4名 | 400,000 |
| フランス人交換整形外科医奨学金 滞在費(2ヶ月)+交通費 100,000×2名 | 200,000 |
| SOFJO/AFJO開催関係費 | 0 |
| 日仏整形外科学会関連事業(表彰など) | 30,000 |
| 日仏共同研究、研究助成 | 30,000 |
| 森崎日整形外科学用語集編纂事業 | 2,100,000 |
| インターネットホームページ維持管理費 | 350,000 |
| 事務局(通信費、事務費、アルバイト代) | |
| 通信費 | 100,000 |
| 事務費 | 100,000 |
| アルバイト代 | 240,000 |
| 会議費 | 50,000 |
| 旅費・交通費 | 250,000 |
| 連絡員費用(ジランさん) | 300,000 |
| 印刷費 | 500,000 |
| 予備費 | 30,000 |
| 出金小計 | 4,680,000 |
| 次年度繰越金 | 61,287 |
| 計 | 4,741,287 |

4

これまでに交換研修に参加された先生方

| 年度 | 氏名 | 所属医局 |
|------|-------|------------|
| 1990 | 稲毛 昭彦 | 大阪医科大学 |
| 1991 | 三輪 隆 | 帝京大学 |
| 1991 | 末松 典明 | 旭川医科大学 |
| 1992 | 星 忠行 | 弘前大学 |
| 1992 | 村上 元庸 | 滋賀医科大学 |
| 1992 | 久保 俊一 | 京都府立医科大学 |
| 1993 | 小浦 宏 | 岡山大学 |
| 1994 | 西川 真史 | 弘前大学 |
| 1994 | 岩崎 幹季 | 大阪大学 |
| 1995 | 石澤 命仁 | 滋賀医科大学 |
| 1995 | 安永 裕司 | 広島大学 |
| 1996 | 安間 基雄 | 順天堂大学 |
| 1996 | 寺門 淳 | 千葉大学 |
| 1996 | 仁平高太郎 | 慶応義塾大学 |
| 1997 | 益田 和明 | 岐阜大学 |
| 1997 | 金子 和生 | 山口大学 |
| 1998 | 山川 徹 | 三重大学 |
| 1998 | 岡本 雅雄 | 大阪医科大学 |
| 1999 | 清重 佳郎 | 山形医科大学 |
| 1999 | 川崎 拓 | 滋賀医科大学 |
| 2000 | 宮本 敬 | 岐阜大学 |
| 2000 | 藤井 一晃 | 弘前大学 |
| 2000 | 細野 昇 | 大阪大学 |
| 2001 | 鳥飼 英久 | 千葉大学 |
| 2001 | 久我 尚之 | 九州大学 |
| 2002 | 瀧川 直秀 | 大阪医科大学 |
| 2002 | 松峯 昭彦 | 三重大学 |
| 2003 | 柁原 俊久 | 昭和大学藤が丘病院 |
| 2003 | 矢吹 有里 | 慶応義塾大学 |
| 2004 | 和田 孝彦 | 関西医科大学 |
| 2004 | 久留 隆史 | 広島大学 |
| 2004 | 小山内俊久 | 山形大学 |
| 2005 | 小田 幸作 | 高槻赤十字病院 |
| 2005 | 松尾 篤 | 九州大学 |
| 2006 | 小室 元 | 阪和住吉総合病院 |
| 2006 | 城戸 顕 | 奈良県立医科大学 |
| 2006 | 早稲田明生 | 国際親善総合病院 |
| 2007 | 益田 宗彰 | 総合せき損センター |
| 2007 | 黒住 健人 | 高知医療センター |
| 2007 | 菊池 克久 | 滋賀医科大学整形外科 |

| 年度 | 氏名 | 所属医局 |
|------|-------|-------------------------|
| 2008 | 上島圭一郎 | 京都府立医科大学 |
| 2008 | 水野 直子 | 行岡病院 |
| 2008 | 金澤 博明 | 順天堂浦安病院 |
| 2008 | 渡辺 千聡 | 大阪医科大学 |
| 2009 | 浅田 卓 | 関西医科大学 |
| 2009 | 山本りさこ | 広島大学 |
| 2010 | 塚本理一郎 | 湘南鎌倉人工関節センター |
| 2010 | 奥村 法昭 | 滋賀医科大学 |
| 2011 | 久保田光昭 | 順天堂大学 |
| 2011 | 西脇 徹 | 慶応義塾大学 |
| 2011 | 斉藤 朝海 | 東京女子医大膠原病 リウマチ痛風センター |
| 2011 | 金城 健 | 沖縄県立南部医療センター |
| 2012 | 齋藤 正純 | 京都府立医科大学 |
| 2012 | 成尾 宗浩 | 東名厚木病院 |
| 2012 | 渡辺 新 | 高萩協同病院 |
| 2012 | 小池 洋一 | 仙台赤十字病院 |
| 2012 | 長谷川浩士 | 公立置賜総合病院 |
| 2013 | 野口 森幸 | 仙台赤十字病院 |
| 2013 | 相川 淳 | 北里大学 |
| 2013 | 高澤 誠 | 千葉大学 |
| 2013 | 市原 理司 | 順天堂浦安病院 |
| 2013 | 百村 励 | 順天堂大学 |
| 2013 | 二村 昭元 | 東京医科歯科大学 |
| 2013 | 越智 健介 | 東京女子医大膠原病 リウマチ痛風センター |
| 2013 | 吉田 雅人 | 名古屋市立大学 |
| 2013 | 竹本 充 | 京都大学 |
| 2013 | 田村 太賢 | 大阪府立母子保健 総合医療センター |
| 2014 | 江口 和 | 下志津病院 |
| 2014 | 深沢 克康 | 関東労災病院 |
| 2014 | 児玉 成人 | 滋賀医科大学 |
| 2014 | 荒瀧 慎也 | 岡山大学 |
| 2014 | 大槻 周平 | 大阪医科大学 |

5

これまでにフランスから交換研修医として来られた先生方と研修施設

| 年度 | 氏名 | 研修病院名 |
|------|-------------------------|---------------------------------|
| 1991 | Philippe LIVERNEAUX | 京都府立医科大学・ 広島大学 |
| 1991 | Luis Michel COLLET | 大阪医科大学・ 滋賀小児センター・ 福岡こども病院 |
| 1992 | Frederic DUBRANA | 福岡整形外科病院・ 九州大学 |
| 1992 | Marc CHASSARD | 慶応義塾大学・ 東海大学・ 札幌医科大学 |
| 1994 | Philippe WICART | 山口大学・金沢大学 |
| 1994 | Philippe RENAUX | 滋賀医科大学・ 岡山大学 |
| 1995 | Michel NINOU | 大阪医科大学・ 新潟手の外科研究所・ 広島大学 |
| 1997 | Bernardo Vargas BARRETO | 国立小児病院・ 岡山大学・ 国立大阪病院 |
| 1997 | Sylvie MERCIER | 大阪医科大学 |
| 1998 | Jérôme COTTALORDA | 大阪医科大学・ 福岡県立柏屋新光園 |
| 1999 | Olivier CHARROIS | 滋賀医科大学・ 京都市立病院 |
| 1999 | Eric HAVET | 滋賀医科大学 |
| 2001 | Laurent JACQUOT | 福岡整形外科病院・ 慶応義塾大学・ 高岡整志会病院 |
| 2001 | Alexandre ROCHWERGER | 大阪医科大学・ 山形大学 |
| 2004 | Brice ILHARRBORDE | 総合せき損センター・ 大阪市立大学 |
| 2007 | Damien BREITEL | 総合せき損センター・ 奈良県立医科大学 |
| 2007 | Sybille FACCA | 弘前大学・山形大学・ 京都府立医科大学・ 広島大学 |
| 2008 | Thomas APARD | 山形大学・ 大阪府立母子保健総合医療センター |
| 2009 | François LINTZ | 京都市立大学 |

6

寄附金を頂戴いたしました。
ご協力ありがとうございました。

- サントリーホールディングス株式会社
- ビー・ブラウンエースクラブ株式会社
- ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
- 小野薬品工業株式会社
- 参天製薬株式会社
- 日本ストライカー株式会社
- センチュリーメディカル株式会社
- 第一三共株式会社
- 日本イーライリリー株式会社
- エーザイ株式会社
- 有限会社永野義肢 (順不同)

編集
後記

昨年5月31日、6月1日に第12回AFJOが京都で開かれました。会長を務められた田中千晶先生と飯田寛和先生によってフランスの先生方そして日本の先生方を最高の“おもてなし”で迎えられました。学会には多くの演題が集まり、様々な分野についてレベルの高い発表、討論が行われました。次回のAFJOを主催される予定のHernigou先生は非常にプレッシャーがかかっておられるようでした、学会中の写真もたくさん掲載しました。

交換研修帰朝報告は5名の先生から原稿をいただきました。どの先生も非常に積極的に研修をされており、私もうらやましくなりました。まだ留学中の先生もおられますので、帰国されて準備が整い次第、帰朝報告をいただくようにいたします。

会長の小林晶先生が「レジオン・ドヌール勲章」を授賞されました。私たち学会員にとりましても非常に名誉なことと嬉しく思っております。小林先生から「日仏交流60年の回顧」というタイトルで原稿をいただきました。小林先生のフランスへの強い想いを知ることができると思います。

名誉会員の七川歓次先生には今回も無理にお願いして、日仏整形外科交流の創世記の原稿をいただきました。毎回、非常に貴重なお話をお書きいただき、現在の交換研修と対比しますと興味深いものがあります。

今年は9月6日に福岡大学医学部リハビリテーション部塩田悦仁教授が福岡で第16回SOFJOを開催されます。フランスから著明な先生が講演に来られる予定ですので、たくさんの先生方の参加をお待ちしています。



エーザイの骨粗鬆症関連製品

骨粗鬆症治療剤

日本薬局方 リセドロン酸ナトリウム錠

劇薬 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること
[薬価基準収載]

アクトネル[®]錠 75mg

骨粗鬆症治療用ビタミンK₂剤

メナテトレンオン製剤

[薬価基準収載]

グラケ[®]カプセル 15mg

〔体外診断用医薬品〕(電気化学発光免疫測定法)

低カルポキシ化オステオカルシンキット [検体検査実施料収載]

血清中低カルポキシ化オステオカルシン (ucOC) 測定用医薬品

ピコルミ[®]ucOC^{*} ※ 販売提携品

● 効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意等については添付文書をご参照ください。

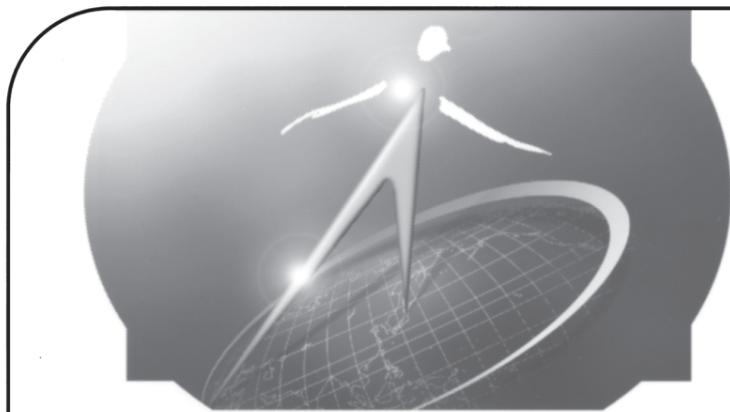
Eisai エーザイ株式会社

〒112-8088 東京都文京区小石川 4-6-10

製品情報お問い合わせ先:

エーザイ株式会社 お客様ホットライン

フリーダイヤル 0120-419-497 9~18時(土、日、祝日 9~17時) ACL1308M01



AA
ARTZ®
ARTZ Dispo®

関節機能改善剤 (ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液)

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

アルツ® 関節注25mg

指定医薬品 処方せん医薬品 注意—医師等の処方せんにより使用すること

アルツ® ディスポ® 関節注25mg



ブリストー包装内滅菌済

特許登録—日本国特許第3831505号；第3845110号(医療用滅菌包装における滅菌方法)

(製造販売元) 生化学工業株式会社
 東京都千代田区丸の内1丁目6-1



ADOFEED®

経皮吸収型鎮痛消炎貼付剤

指定医薬品

アドフィード®
パップ40mg/80mg

(フルルビプロフェン製剤)

(製造販売元) リードケミカル株式会社
 富山県富山市日俣77-3

- 各製品の効能・効果、用法・用量、禁忌、使用上の注意等の詳細は、製品添付文書をご参照ください。
- 各製品共、薬価基準収載

科 研 製 薬 株 式 有 限 公 司

[発売元・資料請求先] 〒113-8650 東京都文京区本駒込2丁目28-8

07L4
 (2008年9月作成)

KYOCERA



Aquala 誕生

見えない革新。

ポリエチレンの特性はそのままに、摺動面を低摩耗化した技術。

それは、人工股関節における「見えない革新。」

日本発、人工関節の未来を変える“革新”を目指して。

www.aquala.jp

京セラメディカル株式会社

大阪本社 大阪市淀川区宮原3丁目3-31(上村ニッセビル10F) 〒532-0003 Tel.06-6350-1057
 東京支社 東京都新宿区西新宿2丁目4-1(新宿NSビル10F) 〒163-0810 Tel.03-5339-3645

札幌営業所 Tel.011-280-6020 大宮営業所 Tel.048-640-7779 京都営業所 Tel.075-353-4322 岡山営業所 Tel.086-803-3620 九州営業所 Tel.092-452-8140
 東北営業所 Tel.022-216-5176 名古屋営業所 Tel.052-930-1481 大阪営業所 Tel.06-6350-1017 広島営業所 Tel.082-212-1003

<http://kyocera-md.jp/>

DePuy Synthes *People inspired™*
 JOINT RECONSTRUCTION
 COMPANIES OF *Johnson & Johnson*

CORAIL® HIP SYSTEM

The science of simplicity

製造販売元

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
 デビューシンセス・ジャパン
 デビューシンセス・ジョイント事業部
 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号
 T. 03 4411 6073 F. 03 4411 5053

depuysynthes.jp

販売名: Corail AMTステム
 承認番号: 224008ZX00015000
 販売名: BIOLOX delta セラミックヘッド (CERAMAX)
 承認番号: 222008ZX00971000
 販売名: ビナクル マラソンポリライナー
 承認番号: 221008ZX01026000
 販売名: ビナクル Porocoat
 承認番号: 222008ZX00779000

CORAIL®
 HIP SYSTEM

©JANKE2013

健康と豊かさを担う責任 Partner in Healthcare

Spine/Joint prosthesis/Trauma

先進医療機器の普及を通して
 社会に積極的に貢献していくこと、
 それが、私たちのハートです。

CMI Partner in Healthcare
Century Medical, Inc.

センチュリーメディカル株式会社

本社: 〒141-8588 東京都品川区大崎 1-11-2
 URL: www.cmi.co.jp

営業第7部 (脊椎インプラント関連)
 TEL.03-3491-0253
 FAX.03-3491-2788

営業第3部 (人工関節・外傷関連)
 TEL.03-3491-1681
 FAX.03-3491-2788



関節機能改善剤

処方せん医薬品^注

スベニール[®] ディスポ関節注 25mg
バイアル関節注 25mg
SUVENYL[®] 精製ヒアルロン酸ナトリウム関節内注射液

注) 注意—医師等の処方せんにより使用すること

※「効能・効果」、「用法・用量」、「用法・用量に関連する使用上の注意」、「禁忌を含む使用上の注意」等については最新の添付文書をご参照ください。
<http://www.chugai-pharm.co.jp>

製造販売元  **中外製薬株式会社**
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1
 ロシュ グループ



SUVENYL

2013年3月作成

骨形成促進剤 という選択肢。

BMD増加効果と骨折発生リスクの抑制

- 【禁忌(次の患者には投与しないこと)】
1. 高カルシウム血症の患者[高カルシウム血症を悪化させるおそれがある。] [重要な基本的注意]の項参照
 2. 次に掲げる骨肉腫発生リスクが高いと考えられる患者[「その他の注意」の項参照]
 - (1) 骨へーゼット病の患者
 - (2) 原因不明のアルカリホスファターゼ高値を示す患者
 - (3) 小児等及び若年者で骨端線が閉じていない患者[「小児等への投与」の項参照]
 - (4) 過去に骨への影響が考えられる放射線治療を受けた患者
 3. 原発性の悪性骨腫瘍もしくは転移性骨腫瘍のある患者[症状を悪化させるおそれがある。]
 4. 骨粗鬆症以外の代謝性骨疾患の患者(副甲状腺機能亢進症等)[症状を悪化させるおそれがある。]
 5. 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳婦[「妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照]
 6. 本剤の成分又はテリパラチド酢酸塩に対し過敏症の既往歴のある患者

【効能・効果】 骨折の危険性の高い骨粗鬆症

【用法・用量に関連する使用上の注意】 (1) 本剤の適用にあたっては、低骨密度、既存骨折、高齢、大顎骨頭部骨折の家族歴等の骨折の危険因子を有する患者を対象とすること。(2) 男性患者での安全性及び再骨折予防効果は確立していない。

【用法・用量】 通常、成人には1日1回テリパラチド(遺伝子組換え)として20μgを皮下に注射する。なお、本剤の投与は24ヵ月間までとすること。

【用法・用量に関連する使用上の注意】 (1) 本剤を投与期間の上限を超えて投与したときの安全性は確立していないので、本剤の適用にあたっては、投与期間の上限を守ること。[「その他の注意」及び「臨床成績」の項参照] (2) 本剤の投与をやむを得ず一旦中断したのちに再投与する場合であっても、投与日数の合計が24ヵ月を超えないこと。また、24ヵ月の投与を終了後、再度24ヵ月の投与を繰り返さないこと。(3) 他のテリパラチド製剤から本剤に切り替えた経験がなく、その安全性は確立していない。なお、他のテリパラチド製剤から本剤に切り替えたときにおける本剤の投与期間の上限は検討されていない。[「その他の注意」の項参照]

※【服用上の注意】 1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること) (1) 腎障害のある患者[外国の臨床試験において、重度の腎障害患者では血中からのテリパラチドの消失に遅延が認められている。] [薬物動態]の項参照 (2) 重度の肝障害のある患者[本剤の重度の肝障害患者における使用経験が少なく安全性は確立していない。] (3) 尿路結石のある患者及びその既往歴のある患者[本剤の投与により、症状を悪化させるおそれがある。] 2. 重要な基本的注意 (1) 本剤の薬理作用により、投与後約4から6時間を最大として一過性の血清カルシウム値上昇がみられる。また、血清カルシウム値は投与後16時間ではほぼ基準値まで下降することが知られているため、本剤投与患者における血清カルシウム値を測定する場合は、本剤投与後16時間以降の測定値を評価標準とすること。本剤の投与にあたっては、患者に十分な説明を行い、特に、嘔気、嘔吐、便秘、腰痛及び筋力低下等の持続性の血清カルシウム値上昇が疑われる症状が認められた場合は、速やかに診察を受けるように指導すること。持続性高カルシウム血症の診断は、血清カルシウム値と測定時点を考慮し、持続性高カルシウム血症と判断された場合は、本剤の投与を中止すること。なお、血清カルシウム値上昇によりシキタリスの作用が増強することがあるため、シキタリス製剤と併用する時は注意すること。[「相互作用」の項参照] (2) 副甲状腺ホルモンの製剤(カルシトリアル、マサカルトール、フルカルトール、エリテカルトール等)、フルボキサミン、シキタリス製剤(シキタリス等) 4. 副作用 国内のプラセボを対照とした臨床試験において、本剤10~40μg/日を投与[※]した安全性評価対象252例中50例(19.8%)に副作用(臨床検査値異常を含む)が認められた。主な副作用は、血中尿酸上昇9例(3.6%)、頭痛7例(2.8%)、悪心7例(2.8%)、ALP上昇5例(2.0%)、筋痙攣3例(1.2%)、高尿酸血症3例(1.2%)、食欲不振3例(1.2%)、血中尿酸上昇3例(1.2%)であった。なお、プラセボを投与した105例中11例(10.5%)に副作用(臨床検査値異常を含む)が認められた。

注) 本剤の用法・用量はテリパラチド(遺伝子組換え)として1日1回20μg皮下投与である。

禁忌を含む使用上の注意の改訂には十分ご注意ください。
その他の使用上の注意については製品添付文書をご参照ください。
*2013年3月改訂(第8版)

製造販売元(資料請求先)
日本イーライリリー株式会社
〒651-0086 神戸市中央区磯上通7丁目1番5号




フォルテオ[®]
皮下注キット600μg
テリパラチド(遺伝子組換え)注射液
骨粗鬆症治療剤

処方せん医薬品 薬価基準収載
(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

FRT-ADA0(RJ)
2013-05

9つの 疾患・症状に 適応のある 経皮鎮痛消炎剤

※詳細は、効能・効果の項目をご参照下さい。



経皮鎮痛消炎剤 ケトプロフェン 2% 【薬価基準収載】
モーラス®テープ 20mg

経皮鎮痛消炎剤 ケトプロフェン 2% 【薬価基準収載】
モーラス®テープL 40mg

【禁忌】 (次の患者には使用しないこと)

- 1) 本剤又は本剤の成分に対して過敏症の既往歴のある患者
〔重要な基本的注意〕の項(1)参照)
- 2) アスピリン喘息(非ステロイド性消炎鎮痛剤等による喘息発作の誘発)又はその既往歴のある患者〔喘息発作を誘発するおそれがある。〕
- 3) チアプロフェン酸、スプロフェン、フェノフィブラート並びにオキシベンゾン及びオクトクリレンを含有する製品(サンスクリーン、香水等)に対して過敏症の既往歴のある患者〔これらの成分に対して過敏症の既往歴のある患者では、本剤に対しても過敏症を示すおそれがある。〕
- 4) 光線過敏症の既往歴のある患者
〔光線過敏症を誘発するおそれがある。〕

【効能・効果】

- 下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎
腰痛症(筋・筋膜性腰痛症、変形性脊椎症、椎間板症、腰部捻挫)、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
- 関節リウマチにおける関節局所の鎮痛

【効能・効果に関連する使用上の注意】

- (1) 本剤の使用により重篤な接触皮膚炎、光線過敏症が発現することがあり、中には重度の全身性発疹に進展する例が報告されているので、疾病の治療上の必要性を十分に検討の上、治療上の有益性が危険性を上回る場合にのみ使用すること。
- (2) 損傷皮膚には本剤を使用しないこと。

【用法・用量】

1日1回患部に貼付する。

【使用上の注意】

1. 慎重投与 (次の患者には慎重に使用すること)

- (1) 気管支喘息のある患者〔アスピリン喘息患者が潜在しているおそれがある。〕
〔「重大な副作用」の項(2)参照〕
- (2) 妊娠後期の女性〔妊婦、産婦、授乳婦等への投与〕の項参照)

2. 重要な基本的注意

- (1) 本剤又は本剤の成分により過敏症(紅斑、発疹・発赤、腫脹、刺激感、痒痒等を含む)を発現したことがある患者には使用しないこと。
- (2) 接触皮膚炎又は光線過敏症を発現することがあり、中には重度の全身性発疹に至った症例も報告されているので、使用前に患者に対し次の指導を十分に行うこと。〔「重大な副作用」の項(3)・(4)参照〕
1) 紫外線曝露の有無にかかわらず、接触皮膚炎を発現することがあるので、発疹・発赤、痒痒感、刺激感等の皮膚症状が認められた場合には、直ちに使用を中止し、患部を遮光し、受診すること。なお、使用後数日を経過して発現する場合があるので、同様に注意すること。
2) 光線過敏症を発現することがあるので、使用中は天候にかかわらず、戸外の活動を避けるとともに、日常の外出時も、本剤貼付部を衣服、サポーター等で遮光すること。なお、白い生地や薄手の服は紫外線を透過させるおそれがあるので、紫外線を透過させにくい色物の衣服などを着用すること。また、使用後数日から数カ月を経過して発現す

- ることもあるので、使用後も相当の間、同様に注意すること。異常が認められた場合には直ちに本剤の使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。
- (3) 皮膚の感染症を不顕性化するおそれがあるので、感染を伴う炎症に対して用いる場合には適切な抗菌剤又は抗真菌剤を併用し、観察を十分に行い慎重に使用すること。
 - (4) 腰痛症、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。
1) 本剤による治療は対症療法であるので、症状に応じて薬物療法以外の療法も考慮すること。また、投与が長期にわたる場合には患者の状態を十分に観察し、副作用の発現に留意すること。
 - (5) 関節リウマチにおける関節局所の鎮痛に本剤を使用する場合は、以下の点に注意すること。
1) 関節リウマチに対する本剤による治療は対症療法であるので、抗リウマチ薬等による適切な治療が行われ、なお関節に痛みが残る患者のみに使用すること。
2) 関節痛の状態を観察しながら使用し、長期にわたり漫然と連用しないこと。また、必要最小限の枚数にとどめること。

3. 相互作用

【併用注意】 (併用に注意すること)

メトレキサート

4. 副作用

- 腰痛症、変形性関節症、肩関節周囲炎、腱・腱鞘炎、腱周囲炎、上腕骨上顆炎、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
総症例1,156例中副作用が報告されたのは57例(4.93%)であり、発現した副作用は、発疹11件、発赤9件、痒痒感18件、刺激感5件等の接触皮膚炎54件(4.67%)、貼付部の膨疹、動悸、顔面及び手の浮腫各1件(0.09%)などであった。(承認時)
- 関節リウマチ
総症例525例中副作用が報告されたのは45例(8.57%)であり、発現した副作用は、接触性皮膚炎17件、適用部位痒痒感12件、適用部位紅斑6件、適用部位発疹6件、適用部位皮膚炎3件等であった。(効能追加承認時)
ほかに医師などの自発的報告により、ショック、アナフィラキシー様症状、喘息発作の誘発(アスピリン喘息)、光線過敏症の発現が報告されている。

(1) 重大な副作用

- 1) **ショック** (頻度不明)、**アナフィラキシー様症状** (0.1%未満)
ショック、アナフィラキシー様症状(蕁麻疹、呼吸困難、顔面浮腫等)があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には使用を中止し、適切な処置を行うこと。
- 2) **喘息発作の誘発(アスピリン喘息)** (0.1%未満)
喘息発作を誘発することがあるので、乾性ラ音、喘鳴、呼吸困難等の初期症状が発現した場合は使用を中止すること。気管支喘息患者の中には約10%のアスピリン喘息患者が潜在していると考えられているので留意すること。なお、本剤による喘息発作の誘発は、貼付後数時間で発現している。〔【禁忌】の項(2)参照〕
- 3) **接触皮膚炎** (5%未満、重篤例は頻度不明)
本剤貼付部に発現した痒痒感、刺激感、紅斑、発疹・発赤等が悪化し、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに**全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化**することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日を経過してから発現することもある。
- 4) **光線過敏症** (頻度不明)
本剤の貼付部を紫外線に曝露することにより、強い痒痒を伴う紅斑、発疹、刺激感、腫脹、浮腫、水疱・びらん等の重度の皮膚炎症状や色素沈着、色素脱失が発現し、さらに**全身に皮膚炎症状が拡大し重篤化**することがあるので、異常が認められた場合には直ちに使用を中止し、患部を遮光し、適切な処置を行うこと。なお、使用後数日から数カ月を経過してから発現することもある。

- その他の使用上の注意については添付文書をご参照下さい。
- 「禁忌を含む使用上の注意」の改訂に十分ご留意下さい。

2013年10月作成

製造販売元 **久光製薬株式会社** 〒841-0017 鳥栖市田代大町408
資料請求先：学術部 お客様相談室 〒100-6330 東京都千代田区丸の内2-4-1



新世代セラミックシステム、誕生。 Aesculap® BILOX® Delta

製造販売元

ビー・ブラウンエースクラップ株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷2-38-16 TEL.03(3814)2524 FAX.03(3814)6110

Aesculap—a B.Braun company.

B | BRAUN
SHARING EXPERTISE

販売名：セラミックヒップシステム デルタ
承認番号：22400BZX00248000
バイオロック オプション ヘッド 22400BZX00247000

optimys ショート ステム



...together with passion!

- ・骨及び関節周辺の軟部組織温存型ショートステム
- ・ステムのトリプルテーパードesignによる確実な回旋安定性
- ・広くプライマリー症例に適合し、個々の患者に対する解剖学的再建が可能



Standard Stem
CCD-angle : 135°



販売名：optimys ショート ステム
医療機器製造販売承認番号：22400BZX00479000

株式会社 マティス 〒108-0075 東京都港区港南2-12-27 イケダヤ品川ビル
Tel 03 3474 6900 (代表) / Fax 03 3474 6906

www.mathysmedical.com



新発売

骨粗鬆症治療剤

劇薬 処方せん医薬品[※]

薬価基準収載

ボンビバ® 静注1mgシリンジ

Bonviva
ibandronate

イバンドロン酸ナトリウム水和物注
注) 注意-医師等の処方せんにより使用すること

「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」などについては添付文書をご参照ください。

発売 [資料請求先]
大正富山医薬品株式会社
〒170-8635 東京都豊島区高田3-25-1
お問い合わせ先：お客様相談室
☎ 0120-591-818

製造販売元 中外製薬株式会社
〒103-8324 東京都中央区日本橋室町2-1-1
 ロシュグループ
【資料請求先】 医薬情報センター
TEL.0120-189706 FAX.0120-189705

©F.ホフマン・ラ・ロシュ社(スイス)登録商標

2013年8月作成